【論　文】

カント主義者クラウゼヴィッツ

横地徳広

序

カール・フォン・クラウゼヴィッツ（一七八〇～一八三一年）は、第一版『戦争論』（*Vom Kriege*, 1832, 以下、*Kriege*と略記）第一篇「戦争の本性について」を始めるにあたり、考察の手順から説明していた。それは、「ホーリズム」概念の教科書的説明として例示できるほどに簡潔明瞭なものである。哲学以外の研究分野を専門とする読者を想定し、『岩波　哲学・思想事典』の標準的説明と比較しておくと、物語り論的解釈学の立場で科学哲学を論じる野家啓一が記すに、ホーリズムとは「部分と全体との関係において、部分に対する全体の優越性を主張し、全体は部分の算術的総和以上のものであるとする考え」のこと[1]。

『戦争論』第一篇の第一章「戦争とは何か」1「始めに」には、こう記されていた。

われわれが想定しているのは、〔戦争という〕われわれの対象をなす個々の要素、次いでその対象をなす個々の部分や肢節、最後にその対象にそなわった**内的脈絡**（innere Zusammenhange）における全体（*das Ganze*）を考察することであり、こうして単純なことから合成されたことへと進むことである。とはいえ、ここで何よりも必要なのは、全体の本質を眼差し始めることである。というのも、ここではとにかく部分も一緒にしつつ、同時につねに全体が思索されなければならないからである。

（*Kriege*, S. 17/二二頁、vgl. SS. 293-296/三〇一頁以下）

1　「ホーリズム」の項（野家ほか編『岩波　哲学・思想事典』、岩波書店、一九九八年、一五〇一頁）を参照。また、「ネオ・プラグマティスト」の科学哲学者ウィラード・v・O・クワインの「意味論的ホーリズムとは、個々の語や文は言語体系全体のコンテクストの中でのみ意味をもち理解しうる、とする立場である」と野家は記している（「ホーリズム」の項、『岩波　哲学・思想事典』、一五〇一頁）。

クラウゼヴィッツいわく、「……こうした戦争は、われわれの概念把握能力を超えない対象のいずれとも同じように、探究心によって解明されうるし、**戦争の内的脈絡**において多かれ少なかれ判明にされうる」が（*Krieg*e, S. 136 / 一四〇頁）、「とはいえ、こうした判明可能性があれば、理論という概念を現実化するのにすでに十分である」（*Krieg*e, S. 136 / 一四〇頁）。未定稿とはいえ、「戦争の内的脈絡」を解き明かす試みが『戦争論』であった。ここで注目すべきはクラウゼヴィッツの次の指摘である。

「理論は戦争の変容可能性すべてを認めなければならないが、とはいえ、戦争の絶対的形態を最上位において普遍的照準点として使用することは理論の義務である……」（*Krieg*e, S. 292 / 三〇〇頁）。絶対戦争は、いわば「統整的理念」として使用されなければならないというわけだ。

クラウゼヴィッツがまずは哲学的視線をむける「事象（Sache, πράγμα＝なされたこと）」は、彼の同時代人であるゲオルク・W・F・ヘーゲルが『精神現象学』（*Phänomenologie des Geistes*, 1807）の「相互承認論」で吟味していた「決闘（Zweikampf）」（*Krieg*e, S. 17 / 二二頁）であり、次いで小規模の「交戦（Gefecht）」を指す「戦闘（Kampf）」であった（*Krieg*e, S. 53 / 五七頁）。

こうして目的を達成する手段諸々のなかでも唯一の手段と言えるのは、戦闘（*Kampf*）である。〔中略〕戦争のなかに現われる効果すべては根源的に戦闘から発しなければならないが、このことはつねに戦争概念にふくまれる。（*Krieg*e, S. 52 / 五七頁）

「これに対して広義の戦争術にとにかく属しているのはまた、戦争のために現に存在する（um des Krieges willen da sind）活動態すべて（alle Tätigkeite）であり、つまり、徴募、武装、装備、訓練といった戦闘力の産出全体である」（*Krieg*e, S. 102 / 一〇七頁、vgl. S 53f. / 五七頁）。このなかで戦闘とは、決闘が「個々の要素」として「さまざまに組織化された或る全体（ein vielfach gegliedertes Ganze）」のことである（*Krieg*e, S. 53 / 五七頁）。戦闘を契機とした「戦争活動態（kriegerische Tätigkeit）」の諸々である「なすこと（πράττειν）」が、このように積極的もしくは消極的に（*Krieg*e, S. 53 / 五八頁、vgl. S. 29 / 三四頁）、「個々の部分」として戦争の「全体」を織りなす。ここまでを見るに、『戦争論』の思考法はヘーゲル的であるように思われる。

とはいえ小稿で再確認するのは、そのカント的可能性である。イマニュエル・カント『純粋理性批判』（*Kritik der reinen Vernunft*, 1781 / 1787, 以下、A / B で参照頁を指示）は「全体という理念」を「統制的」に「使用」し、「感性」、「悟性」、「理性」にそなわる機能それぞれの相互連関を体系化していく哲学書であったが（vgl. A64 / B89, A298 / B355）、小稿では、この成り立ちをふまえてカント主義者クラウゼヴィッツの哲学的思考にそくし、同時に、プラテイン＝なすこと、プラグマ＝なされたこと、あるいは「全体」を意味する「ホロス（ὅλος）」といった古代ギリシア的概念の歴史的展開を念頭におきながら[2]、『戦争論』は、思考という行為をふくむ「社会的

2　野家『増補　科学の解釈学』（ちくま学芸文庫、二〇〇七年）の二八九頁を参照。「ホーリズム」という語はジャン・C・スマッツが一九二六年に最初に使用したと言われているが（J・C・スマッツ『ホーリズムと進化』、石川光男、片岡洋二訳、玉川大学出版部、二〇〇五年、三二〇頁）、体系性や全体性にもとづく哲学的理論はクラウゼヴィッツ以前から多々存在した。小稿との関連で言えば、哲学の術語をラテン語からドイツ語へと翻訳し、カント批判哲学に影響を与えたクリスティアン・ヴォルフの「体系哲学」を例示できる。

実践」[3]としての戦争にそなわるカント的なプラグマティック・ホーリズムの構造を提示した哲学書であることを明らかにする[4]。

小稿の進行を示す。まず**第一節「クラウゼヴィッツ学のコンテクスト」**では『戦争論』の研究状況をふまえ、クラゼヴィッツのカント主義を検討する必要性を示す。次に**第二節「クラウゼヴィッツの統整的理念と建築術」**では、『戦争論』に内在し、統整的理念と絶対戦争概念に注目してそのカント的契機を指摘する。つづいて**第三節「カントのプラグマティック・ホーリズム」**では『純粋理性批判』のそれを考察し、クラウゼヴィッツがその理解可能性を受容しえたことを確認する。**第四節「絶対戦争、制限戦争、政治」**では、プラグマティック・ホーリズムの現代的系譜に『戦争論』をおいてその可能的内実を確かめ、これをふまえて**第五節「クラゼヴィッツの現象学的解釈学」**では『戦争論』の現代哲学的解釈を試みる。**結び「カントとは道を違えて」**では、以上の節五つをふまえ、『戦争論』における「講和（＝平和、Frieden）」と（*Krieg*e, S. 44/四九頁、S. 329/三三八頁）、「勝利（Sieg）」の概念的優先関係を（*Krieg*e, S. 13/十八頁）、統整的理念の観点から検討する。

3　Robert Brandom, *Tales of the Mighty Dead, Historical Essays in the Metaphysics of Intentionality*, Harvard University Press, 2002, p. 52. これは、カントの「比量的な社会的実践」を説明した箇所。

4　プラグマティズムとホーリズムの理論的に有機的な相関関係にかんしては、小稿第三節もふまえ、以下を参照。Mark Okrent, “Heidegger’s pragmatism redux”, in: *The Cambridge Companion to Pragmatism*, edited by Alan Malachowski, Cambridge University Press, 2013, p. 136f.

一　クラウゼヴィッツ学のコンテクスト

『戦争論』研究の大家ピーター・パレットは、クラウゼヴィッツにとっての「客観性」と「主観性」とを論じ、そのあいだで彼の思索がもつ特徴を結論づけた文脈で、客観性にそくすクラウゼヴィッツの哲学的思考が、一八〇四年までを生きたイマニュエル・カントの批判哲学に由来する旨を指摘し、こう述べていた。

カントの認識批判が提起したのは、自分に外部の事柄への判断に内在した問題の解決であった。読者の多くはすぐさまカントの教説をイデオロギー的な目的と結びつけ、教説がもつインパクトを歪めた。他方、クラウゼヴィッツは、二十代のころ早くにカントの教説にかんする諸講義を聞いており、カントのアイデアを利用して実用的なこと（the pragmatic）から理論的なことへと移行するための確固とした基盤を見出した。[5]

理論的吟味を欠く、単純な実践偏重をパレットは「実用的なこと」と言う。これに対して、小稿で考察するプラグマティック・ホーリズムは、カントの術語法であえて表現すれば、「理性と悟性が使用する諸概念の体系論」とでもなろうが、いずれにせよ、そうして「実用的なこと」の議論ではなく[6]、「語用論」やネオ・

5　Peter Paret, “Machiavelli, Fichte, and Clausewitz in the Labyrinth of German Idealism”, in: *Eica & Politica*, XVII, 3, 2015, p. 95. 併せてピーター・パレット『クラゼヴィッツ：『戦争論』の誕生』（白洲英子訳、中公文庫、一九九一年）の一三二頁以下を参照。

6　小稿で考察するカント的なプラグマティック・ホーリズムの「プラグマティック」は、当然、カントの講義『実用的観点における人間学』（一七九八年）における「実用的」の意味ではない。

プラグマティズムへ展開した、プラテイン概念、プラグマ概念に発する哲学的原理論をプラグマティック・ホーリズムと呼ぶ[7]。

さて、クラウゼヴィッツが「一八〇一年末」から「一八〇四年」までのあいだに聞いたその「諸講義」は[8]、「『永久平和論』のフランスへの紹介に与って力があり、ベルリンでのカントの代理人ともいうべき役割を果たしていた」[9]、ヨハン・G・K・Chr・キーゼヴェッターが、ゲルハルト・フォン・シャルンホルスト運営の「ベルリン士官研修所」で行なった講義だと言われている[10]。もちろんクラウゼヴィッツ自身がカントやヘーゲルの著作それ自

7　「論理」という言葉の使い方は、クラウゼヴィッツの場合、一貫していないけれど（*Kriege*, S. 330 / 二八六頁、S. 31 / 三六頁）、「戦争はこうして対立する国民や政府の考えを別の文書や言葉でただ表現したにすぎないのか」と自問したのち、「戦争はもちろん戦争に固有の文法（Grammatik）をもつが、とはいえ戦争に固有の論理（Logik）はもたない」と述べていた（*Kriege*, S. 330 / 三三八頁）。彼の〝Politik〟概念を「政治（politics）」概念と「政策（policy）」概念とに分けるアンツィリオ・J・エチュヴァリア二世いわく、「通常、この一文は、戦争はただの政治的道具であり、それゆえ、文法が発話を制限するのと同じくらいに多くの制限を戦争が政策に課すという考えを強めたものと理解されている」（Antulio J. Echevarria II, *Clausewitz and Contemporary War*, Oxford University Press, 2013, p. 88f.）。

比喩を借用元に返せば、文法は「統語論（Syntax）」、論理は「論理学（Logik）」で扱われるが、単純に戦争という社会的実践を分節化する論理言語の自己完結的な古典的論理学は存在しないという意味かもしれない（cf. パレット『クラゼヴィッツ』、一一四頁、野家『言語行為の現象学』、勁草書房、一九九三年、一九五頁）。

これに対して小稿でとりあげるのは社会的実践の「意味論（Semantik）」、社会的個人とその行為とのかかわりを問う「プラグマ論（Pragmatik）」である。クラゼヴィッツ『戦争論』にかかわる文法概念にかんしては、拙稿「戦争概念の経験的文法：その多様性を手がかりにした哲学的確認」（戦略研究学会、第十三回大会、東京経済大学、二〇一五年四月十八日、口頭発表）においてヴィトゲンシュタインの観点から論じたことがある。この観点をふまえて言えば、「弱いＡＩ」のアルゴリズムは統語論をそなえているが、意味論を欠き、これに対して戦争は社会的実践として意味論も内蔵する。

拙稿「戦争概念の経験的文法」の内容の一部にかんしては、持田睦、横地編著『戦うことに意味はあるのか：倫理学的横断への試み』所収の拙稿である序章「多様な戦争をめぐる形而上学とプラグマティズム」（弘前大学出版会、二〇一七年）を参照。

8　パレット『クラゼヴィッツ』の第四章「第二の父シャルンホルストに出会う」を参照。

9　福谷茂『カント哲学試論』（知泉書館、二〇一〇年）の二五二頁を参照。

10　パレットがクラウゼヴィッツの修学状況を説明するに、「若き士官として彼は、カント哲学を普及させたヨハン・ゴットフリート・キーゼヴェッターによる論理学と倫理学の入門講義に参加した」（Peter Paret, *Understanding War: Essays on Clausewitz and the History of Military Power*, Princeton University Press, 1992, p. 104）。Vgl. Hermann Cohen, *Von Kants Einfluss auf die Deutsche Kultur*, Ferd Dummlers, 1883, S. 31. カントが生涯を過ごしたケーニヒスベルクは東プロイセンの中心都市であったが、「マールブルク学派の祖」であるヘルマン・コーエンは前掲頁でシャルンホルスト、アウグスト・ヴィルヘルム・グナイゼナウ、クラウゼヴィッツらを「プロイセン学派」と呼ぶ。

そのカントは批判哲学において論理学をいくつかに区別した。つまり、「可能的経験一般の形式を先取り的に認識すること」（B303）を目的とする「超越論的論理学」は「存在論」である「真理の論理学」と「特殊形而上学」である「仮象の論理学」とに分かれ、アリストテレス以来の古典的論理学は「一般論理学」と呼ばれたが、一般論理学はカントのいわゆる『イエッシュ論理学』講義で「悟性使用一般の予備学」とされ、超越論的論理学と区別された（『イエッシュ論理学』、IX. S. 15）。

キーゼヴェッターの生涯にかんしては、以下を参照。
https://de.wikisource.org/wiki/ADB:Kiesewetter,_Johann_Gottfried_Karl_Christian

ここで挙示されていたキーゼヴェッターの著作は以下。*Über die ersten Grundsätze der Moralphilosophie*, 1788, 2te Auflage, 1804. *Versuch einer faßlichen Darstellung der wichtigsten Wahrheiten der neuen Philosophie für Uneingeweihte*, 1795, zwei Bande, 1803, in 4te Auflage, in einem Bande redigirt von Flittner, 1824. *Auszug aus Kant's Prolegomena*, 1796. *Grundriß einer allgemeinen Logik nach kantischen Grundsätzen*, 1796, 4te Auflage, 1824. *Prüfung der Herder'schen Metakritik*, 1799. *Faßliche Darstellung der Erfahrungs-Seelenlehre*, 1803, 2te Auflage, 1806. *Die ersten Anfangsgründe der reinen Mathematik*, 1804, 4te Auflage, 1818. Hodegetik, 1811.

体をどれくらい読んでいたか、はっきりしない点はクラウゼヴィッツ研究者たちのあいだで意見の一致するところであり、ヴェルナー・ハールヴェークの論考「クラウゼヴィッツにおける哲学と理論」によれば、クラウゼヴィッツは、キーゼヴェッターの著作『カントの基本原則にもとづく一般論理学概要』(*Grundriß einer allgemeinen Logik nach kantischen Grundsätzen*, 1791) を通じて、カント批判哲学の超越論的構制や理念の統整的使用のことを学んでいる[11]。問題は、クラゼヴィッツのカント哲学理解が、どのような意味で「実用的なことから理論的なことへと移行するための確固とした基盤」となったのか、この点にある。すなわち、カントは理性や悟性による概念や理念の使用というプラテイン＝なすことにかんする哲学的原理論として『純粋理性批判』を記したが、クラウゼヴィッツがこうした理論的なことへと移行する仕方が問われている。

あらためて確認すれば、「プラグマティズム」とは一般に「概念の使用が概念の内容を規定する」という思想的立場のことであり[12]、哲学的語用論をふくむ。また、カントが『純粋理性批判』で遂行した、いわゆる「理性の限界画定」に倣い、「言語の限界画定」を試みたカント主義者ルートヴィヒ・J・J・ヴィトゲンシュタインは諸学における文脈主義への「言語論的転回」を準備した遺稿『哲学探究』(*Philosophische Untersuchungen*, 1953) の第四三節で「或る単語の指意 (Bedeutung) は言語のなかでのその使用である」[13]と規定していた。だとすれば、プラグマティック・ホーリズムとは、言語哲学的に言えば、文脈において語を使用する実践的な仕方である指意やその「アスペクト」である「意味 (Sinn)」の諸々が織りあわされたコンテクストの全体連関のことであり、哲学的行為論の観点から言えば、脈絡において何かをなす (＝プラテイン) なかで決まる、その何かや行為 (＝プラグマ) の意味諸々が織りあわされたコンテクストの全体連関のことである。

わけてもカントの場合、概念や理念が合理的脈絡において使用される可能性／不可能性を問う仕方で批判哲学のプラグマティック・ホーリズムを提示した。

クラウゼヴィッツは、「……われわれの区分によれば、戦術は交戦における戦闘力の**使用**を教え、戦略は戦争の目的のための交戦の**使用**を教える」(*Kriege*, S. 103 / 一〇八頁) と整理していたが、パレットが言う「理論的なことへの移行」とは、こうした使用の諸々が織りあわされたプラグマティック・ホーリズムにかんしてクラ

11 Werner Hahlweg, "Philosophie und Theorie bei Clausewitz", in: *Freiheit ohne Krieg, Beiträge zur Strategie-Diskussion der Gegenwart im Spiegel der Theorie von Carl von Clausewitz*, Mit einem Vorwort von Ulrich de Maiziere Präsident der Clausewitz-Gesellschaft, hrsg. von Clausewitz-Gesellschaft, Dümmler, 1980, SS. 326-328 (W・ハールヴェーク「クラウゼヴィッツにおける哲学と理論」、クラウゼヴィッツ協会編『戦争なき自由とは：現代における政治と戦略の使命』所収、日本工業新聞社、一九八二年、四四一～四四二頁)。キーゼヴェッターが「理念の統整的使用」を説明する箇所は以下を参照。Johann G. K. Chr. Kiesewetter, *Grundriß einer allgemeinen Logik nach kantischen Grundsätzen*, 4te Auflage (1824), Aetas Kantiana, 1973, § 91, SS. 141-143.

12 久保陽一『生と認識：超越論的観念論の展開』(知泉書館、二〇一〇年) の二九〇頁を参照。併せて野家『増補　科学の解釈学』の二八五頁を参照。

13 Ludwig Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, edited by P. M. S. Hacker & Joachim Schulte, Wiley-Blackwell, 2010, § 43, p. 25.

ウゼヴィッツがカント的に思索することへの移行であった。

ここで「『戦争論』はカント的なプラグマティック・ホーリズムの書だ」という小稿の解釈を見えやすくするため、「ピッツバーグ・ヘーゲリアン」にして「ネオ・プラグマティスト第二世代」のロバート・B・ブランダムの論文集『大いなる死者の物語：志向性の形而上学における歴史的試論　』（*Tales of the Mighty Dead, Historical Essays in the Metaphysics of Intentionality*, 2002, 以下、*Tales*と略記）を参照し、補助線を引きたい。彼がこの著作で読み解いたのは、カント『純粋理性批判』、ヘーゲル『精神現象学』、マルティン・ハイデガー『存在と時間』（*Sein und Zeit*, 1927, 以下、*SZ*と略記）、ヴィトゲンシュタイン『哲学探究』などだが[14]、これらをプラグマティック・ホーリズムの思想史として提示していた。この思想史が小稿の補助線となる。

プラグマティック・ホーリズムというこの観点から確認すれば、『純粋理性批判』は、たとえばカント学者の福谷が『カント哲学試論』（以下、『試論』と略記）で明快に示したように、カント内在的にもそれをいわば「ホーリズムの書」と特徴づけうるし（『試論』、第二章「物自体と『純粋理性批判』の方法」）、じっさい『純粋理性批判』や『実践理性批判』を紐解けば、ホーリズムの思考を示す概念や記述が散りばめられた様子を確認できる。カント批判哲学のホーリズムという観点から、概念や理念の使用可能性にかんする体系的全体性に注目すれば、カント主義者キーゼヴェッターにクラウゼヴィッツが学んだかぎり、彼がカント的なプラグマティック・ホーリズムの理解を受容していた可能性は問いうる。

またブランダムの解釈によれば、悟性非理性に使用される「カテゴリー」の「現象」への適用の「客観的妥当性」が問われた（A93 / B126）「規範論的転回」をカント批判哲学はプラグマティック・ホーリズムの思想史にもたらし、これを経て『精神現象学』が初めて社会性のプラグマティック・ホーリズムを提示した（*Tales*, p. 31f.）。こうしてブランダム的に見ても[15]、『戦争論』は決闘のヘーゲル的考察をふくみつつ、カント的なプラグマティック・ホーリズムとして成り立ちうるわけである。

加えて『存在と時間』のいわゆる「日常性の解釈学」が「プラグマティストの作品」（*Tales*, p. 329）であることを指摘する先例としてブランダムが挙げた米国の大陸哲学研究者ヒューバート・ドレイファス『世界内存在：ハイデガー『存在と時間』注釈』（*Being-in-the-World: A Commentary on Heidegger's Being in Time*, 1990）によれば、『存在と時間』でハイデガーはいわゆる「日常性のプラグマティズム」を「頽落」（*SZ*, § 38）として批判的に解釈するなか、それゆえに的確なプラグマティズム理解を語りだしていた[16]。こうした「日常性の解釈学」で説明された「環境世界（Umwelt）」概念は（*SZ*, § 15）、『存在

14　「戦争ゲーム」概念からヴィトゲンシュタイン、クラウゼヴィッツ、カントの全体論的考察を論じたものとして以下を参照。Philipp von Hilgers, *Kriegsspiele: Eine Geschichte der Ausnahmezustände und Unberechenbarkeiten*, Wilhelm Fink, 2008, Chap. III and VI.

15　ブランダムは、「カントの規範的合主義」（*Tales*, p. 31）をヘーゲル的に修正して「社会的機能主義」を示し、ハイデガーとヴィトゲンシュタインの志向性を「意味論的プラグマティズム」（*Tales*, p. 32）の観点から特徴づける。

16　Hubert L. Dreyfus, *Being-in-the-World: A Commentary on Heidegger's Being in Time, Division I*, The MIT Press, 1990, p. 342, note 7.

と時間』までの思索史にあって、その構造が目的手段連関のアリストテレス的でカント的なコンテクスト全体性として提示されるが、環境世界における用具諸々の「指示連関」にそなわる全体性とこの全体性に有限的人間がなじんでいることを（vgl. *SZ*, § 18）説明するため、ドレイファスは一九二五年夏学期講義『時間概念史へのプロレゴメナ』（*GA20*）を参照する。カント時間論と出会い、「超越論的ハイデガー」が誕生する直前だが、『存在と時間』と構想を同じくする講義である[17]。引用は以下である。

部屋との出会いは、私が物を一つずつまずは把握し、物諸々の多様性をまとめ、それから一つの部屋を見るという意味でなされるのではない。第一次的に私は或る指示全体性を完結したものとして見、その全体性から個々の家具やその部屋に現に在るものを把握する。一つの完結した指示全体性という性格をもつ、その環境世界は、同時に個別的な親しみによって際立たせられている。（*GA20*, S. 253, Cf. Dreyfus, *Being-in-the-World*, p. 103）

いわば「戦争の環境世界」も、成り立ちは同じである。

「兵士は徴募され、制服を着用し、武装し、訓練されている」と同時に「その兵士が睡眠をとり、飲食し、あるいは行軍する」が（*Kriege*, S. 53 / 五七頁以下、vgl. S. 102 / 一〇七頁）、このとき、さまざまな用具、所作は兵士になじまれ、すべては戦闘可能性のために織りあわされている。この「戦闘は、われわれが交戦と呼ぶ諸行為（*Akte*）に限っても、個別行為の多かれ少なかれ膨大な数から成り立ち、……新たに諸統一態を形成していく」が（*Kriege*, S. 103 / 一〇八頁以下）、「ここから生起するのはまったく異なった活動態であり、つまり、交戦の諸々をそれ自体で配列し遂行することと、戦争目的のために交戦の諸々をそれ自体のもとで結合することであった」（*Kriege*, S. 103 / 一〇八頁以下）。前者の「配列」は「戦術」、後者の「結合」は「戦略」と呼ばれるが、これが戦争の環境世界における「指示全体性」＝内的脈絡を分節化する二大視点となる。

小稿の主眼は『戦争論』テキストに内在して解釈し、その整合性をどこまで高めうるかを確かめ、未定稿『戦争論』を実践哲学書として読み解くための一つの物差しを提示することにある。加えて、このように読解される『戦争論』の哲学的価値を際立たせるため、クラウゼヴィッツの後世を生きたハイデガーのカント哲学受容がプラグマティック・ホーリズムの可能的内実を豊かにした点に注目し、『戦争論』の現象学的解釈も適宜、行なう。つまり、テキストに内在して整合的に解釈する可能性と、現象学的観点からプラグマティック・ホーリズムとして解釈する可能性とを問い、両者の重なりと違いを確かめるということである。

二　クラウゼヴィッツの統整的理念と建築術

小稿では、クラゼヴィッツ『戦争論』をプラグマティック・ホーリズムの哲学的系譜へと多重的に位置づけつつ、『戦争論』に内蔵されたカント的思考を吟味するが、わけてもそれは、クラウゼヴィッツが絶対戦争概念をカント的な統整的理念として理解していた点に勝れて現われている。

17　このあたりの事情は、細川亮一『意味・真理・場所：ハイデガーの思惟の道』（創文社、一九九二年）の一三二～一三四頁を参照。

ハールヴェークは、「絶対的なこと」の概念をシャルンホルスト思想のうちに見出していたが[18]、カント『純粋理性批判』では絶対的なことへの統整的理念の関係が語られていた。

「さて、超越論的な理性概念は諸条件を綜合するさいにつねに絶対的全体性（Totalität）だけにかかわり、そして端的に、つまりはどの関係にあっても無条件的なことに到達しないのなら、それは決して終わることがない」（A326 / B382）。超越論的理性概念とは統整的理念のことだが、「それゆえ、〔超越論的分析論で示される〕或る学知のそうした完全性が可能であるのは、アプリオリな悟性認識の全体という理念に媒介される場合に限られ、それはつまり、悟性認識を構成する諸概念がこの理念にもとづいて規定され区分されることに仲介される場合であり、したがって、その諸概念を一つの体系において脈絡づけることに仲介される場合に限られる」（A64 / B89）。「純粋悟性の認識を総括すると、この総括は〔全体という〕一つの理念のもとで包括され規定されうる一つの体系をなすだろう……」（A65 / B90）。

有限的現実における多種多様な制限戦争の或る可能無限的全体を「一つの体系として脈絡づける」ことが可能であるのも、制限戦争の可能的現実が絶対戦争という統整的理念「のもとで包括され規定されうる」からであった。

とはいえもちろん、『戦争論』にヘーゲル的思考を読み取ることも可能である。戦場でクラウゼヴィッツ自身が目の当たりにしてきた軍人の「精神」が考察されると同時に[19]、「精神の自由」は戦争にまつわる多種多様な「事象（Sache）」の本質を見抜いて支配することが指摘されており（*Kriege*, SS. 286-289 / 二九四～二九六頁）、また、『精神現象学』の決闘概念をとりこむ形で『戦争論』が執筆された見込みも高い[20]。ただし、「単純なことから合成されたことへと進む」ことは確かだが（*Kriege*, S. 17 / 二二頁）、『戦争論』の全体構制とそこで示された哲学的内実をふまえれば、絶対戦争はヘーゲルの「絶対精神」概念に比せられたものではない。「否定の否定」という「媒介」の「動的論理」によって精神が経験の諸段階を高進

18 W. Hahlweg, “Philosophie und Theorie bei Clausewitz”, in: *Freiheit ohne Krieg*, S. 326（ハールヴェーク「クラウゼヴィッツにおける哲学と理論」、『戦争なき自由とは』所収、四四一頁）。

件のシャルンホルストとクラウゼヴィッツの思想的影響関係を確かめつつ、クラウゼヴィッツが残した「お知らせ（Nachricht）」（一八二七年七月十日）に示された絶対戦争と制限戦争の区別という観点から、未定稿『戦争論』を読み解くハンス・デルブリュックの構えに小稿も倣う。Vgl. Hans Delbrück, *Die Neuzeit: Vom Kriegswesen der Renaissance bis zu Napoleon*, in: *Geschichte der Kriegskunst*, Nikol, 2017（1920）, 4te. Kpitel.

19 コーエンが強調した点である。Vgl. H. Cohen, *Von Kants Einfluss auf die Deutsche Kultur*, S. 33.

20 『戦争論』東独版テキストを訳出したドイツ社会哲学研究者の清水多吉はこう説明している。

彼クラウゼヴィッツは、陸軍大学〔ママ〕当時カント派の教授キーゼウェッターの講義を聴き、フィヒテを読み、ヘーゲル哲学に傾倒していた。特にヘーゲル哲学の影響は本書の理論的論述のスタイルに見られる。例えば、戦争を論じるのに、一人と一人の決闘の分析から始めて、絶対戦争という理念を最後にもっていく論述がそうである。これは個的意識の分析から始めて、主観精神、客観精神を論じて絶対精神に終るヘーゲル哲学を思わせる。（清水訳『戦争論（上）』解説、中公文庫、五九六頁）

カントとヘーゲルのいずれに引きつけて『戦争論』を読むにしても、両者の哲学にそなわるポテンシャルを文脈に借りて『戦争論』の内在的可能性を吟味することになる。ただし、聖書原理主義者が直線的時間表象にもとづいてキリスト教的終末を理解しながらヘーゲル『精神現象学』を浅薄に読むとき、絶対精神と絶対戦争が終末として重ねあわせられてしまう。

し、「絶対精神」へと至る思考のプロセスを『戦争論』は欠くからである[21]。

『戦争論』は、「絶対戦争に至る弁証法的運動の書」ではなかった。むしろ批判的思考を高進させていくカント『純粋理性批判』に近しい。

「われわれの認識すべては感官から始まり、そこから悟性へと進んで理性で終わるが、理性を超えでた場合、直観の素材を加工し、その素材を思惟最高の統一へともたらす高次のものは何ひとつとしてわれわれには見出されない」（A298 / B355）。こう述べるカントに対して、クラウゼヴィッツは、戦闘＝交戦を織りなす個別行為の一つ一つから眼差し、さまざまな制限戦争のなかで戦術面と戦略面とを見分けるが、このとき、絶対戦争という理念は統整的に使用され、戦争の内的脈絡をなす多種多様な構成要素をまとめあげる機能をもつ。この意味で『戦争論』は「単純なことから合成されたことへと進む」。

理論理性≒悟性に思考しうること／しえないことの境界が画定されたカント『純粋理性批判』にあって悟性は「規則の能力」、理性は「原理の能力」（A299 / B356）、あるいは「推論の能力」（A330 / B386）とされた。問われていたのは「純粋理性の諸原理」の「統整的使用」である（A664 / B692）。この問いに答えてカントは、「可能的経験にかんする悟性活動すべてを体系的に統一することは**理性の仕事**であり、それは、悟性が諸現象の多様を諸概念によって連結し、経験的法則のもとにもたらすのと同じである」と述べる（A664 / B692）。こうして悟性と感性が協働して構成した「可能的経験」すべてに体系的統一をもたらすさい、超越論的理念が統制的に使用される。「理性の仕事」である。

とはいえ、悟性活動の諸々は感性の図式なしには無規定的である。まったく同様に理性の統一もまた諸条件と度合いにかんして、すなわち、悟性がその諸概念をそれのもとへと体系的に結合すべき諸条件と、そして、どのくらい悟性がその諸概念を体系的に結合すべきかという度合いとにかんして、それ自体では無規定的である。しかしながら、悟性概念すべての一貫して体系的な統一に対して、いかなる図式も直観に見出されないにしても、そのような**図式の或る類比物（Analogon）**がやはり与えられうるし、与えられなければならない。この類比物は、或る**原理**にあって悟性認識を分割し合一する最大限という**理念**である。（A664f. / B692f.）

理性は「原理」の能力であったが、「図式の類比物」である「理念」を統整的に使用する。そもそも、判断全体の分節機能であるカテゴリーを「超越論的図式」は時間形態一般のアスペクトとして表現し、「想像力（Einbildungskraft）」の可動範囲を制限し規定していたが、カント『純粋理性批判』を参照してヴィトゲンシュタインを読み解く守屋唱進は「概念の図式が当の概念をめぐる想像力

21　ヘーゲル『精神現象学』は、「絶対精神の現実性」に「感覚的確信」がふくまれることを見こんで、『精神現象学』の始まりとしており（vgl. M. Heidegger, *Beiträge zur Philosophie, Vom Ereignis*, *GA65*, V. Klostermann, 1994, S. 426）、『精神現象学』の諸段階は絶対精神の現実性にふくまれるという、その構造は『精神現象学』全体におよぶかぎり、クラウゼヴィッツが注目した『精神現象学』の相互承認論という段階も、絶対精神の現実性にふくまれ、つまり、絶対精神が『精神現象学』の諸段階に偏在するということになる。

の限界と見做しうる」[22]と説明していた。こうした「図式の類比物」である「理性概念はただ蓋然的に考えられており、つまり、（**発見的虚構**としての）理性概念へとかかわるなか、経験の領野における体系的な悟性使用の統整的原理を基礎づけるためのものである」（A771./B799）。アスペクト知覚は図式である「アスペクトの閃き」という発見機能をそなえ、ヴィトゲンシュタインが指摘するように、「とはいえ、私がアスペクトの閃き（Aufleuchten）において知覚するのは対象の或る属性ではなく、その対象と他の諸対象との或る内的関係（interne Relation）である」かぎり[23]、「発見的虚構」は消極的な意味で言われているのではない。統整的理念は経験的直観の裏づけをもたないがゆえに「虚構」と呼ばれはするが、図式の類比物として可能的経験すべての体系的統一がカバーする可能的範囲を「発見」する。理性がもたらす図式の類比物は、そうした可能的範囲を体系的に統一しながら、その限界画定を行なうわけである。

だとすれば、クラウゼヴィッツの絶対戦争概念もまた、ナポレオンの戦争スタイルにインスパイアされ吟味された理性概念であり、多種多様な制限戦争の可能的経験すべてを照らしだすための光源、あるいは映しだすための鏡として、つまりは「発見的虚構」として統制的に使用される。

ただし、カントの場合、「発見的虚構」という概念が対象を規定するわけではない点は、絶対戦争の内実がそれなりに語られる

22　守屋唱進「アスペクトの知覚」（『理想』所収、六一六号、理想社、一九八四年）の一八四頁。

23　L. Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, § 247, p. 223.

クラウゼヴィッツのケースと異なっている。カントはこう述べていた。

……たとえば世界の諸物は、これらがその現存をあたかも最高の或る叡知から得るかのように（als ob）、考察されなければならないと言われる。こうした仕方で理念は本来一つの**発見的概念**にすぎず、明示的な概念なのではない。そして対象がいかなる性質をもつかを示すのではなく、われわれはこの**発見的概念**に手引きされてどのように経験一般の諸対象の性質と連結とを求めるべきかを示す。（A670f./B698f.）

これに対してクラウゼヴィッツの「特殊形而上学」は、「第二の父」シャルンホルストとの思想的影響関係のもと、ナポレオン戦争の衝撃が彼に見せつけた「絶対的なこと」を主題としていたように思われる。

つまり、ナポレオン戦争を絶対戦争〈として〉解釈的に了解する、アスペクトの閃きである。だから、発見的虚構あるいは発見的概念としての絶対戦争は、カントのそれらと異なり、現実的対象としてそれなりにその内実がイメージされうる面もあった。

こうしてクラウゼヴィッツが絶対戦争という統整的理念に照らして多種多様な制限戦争の可能的現実すべてを体系的に統一しながら、戦争の内的脈絡を構成する諸概念を使用していく仕方は、カント的なプラグマティック・ホーリズムの「建築術」に近しい。

クラウゼヴィッツに哲学をレクチャーしたキーゼヴェッターもまた、『カントの基本原則にもとづく一般論理学概要』で「学」とは何か、その学である「体系認識」の「体系」とは何かを問うなか、「体系学（Systematik）」は「認識の寄せ集め（Aggregat）やラプソ

ディ」ではないと述べ、「或る全体の理念」にもとづいて諸認識を体系へとまとめていく「純粋な一般論理学」を「一般的な建築術（Architektonik）」と呼んでいた[24]。

カント『純粋理性批判』は建築の比喩でその体系性が説明されていたけれど、クラウゼヴィッツが建築の比喩で『戦争論』を語る場面は以下である。

交戦は戦争において唯一実効性（Wirksamkeit）があり、交戦にあってわれわれに対抗する戦闘力の殲滅は目的への手段である。事実、交戦が生起しない場合でさえそうであるのは、いずれの場合でも決戦（Entscheidung）の根底には或る前提が存在するからである。つまり、そうした殲滅は疑いないという考察がその前提である。したがって、敵戦闘力の殲滅は戦争行為すべて（alle kriegerische Handlungen）の基礎であり、**アーチ**がその**台石**にかかっているように、戦争行為すべてが組みあわされるさいに依拠する最終的な**支点**である。（*Kriege*, S. 56/ 六〇頁以下）

クラウゼヴィッツは諸学に対する哲学の「基礎づけ主義」という意味で「土台」や「最終的な支点」と言っているのではない。それなしには織物を作りえない契機としての織り糸、すなわち、袖やポケット、ボタンなどの諸々を織りこんでいくのに不可欠な織り糸である戦闘が土台や最終的な支点に喩えられている。カントやキーゼヴェッターが語る体系学の建築術を受けてクラウゼヴィッツは戦争の成り立ちを織布に喩えて説明するわけだ。

ここで建築的比喩のカント的文脈を確認しておく。

24　J. G. K. Chr. Kiesewetter, *Grundriß einer allgemeinen Logik nach kantischen Grundsätzen*, § 269, SS. 430-433.

小稿の冒頭で引用したように、野家はホーリズムを説明して「部分と全体との関係において、部分に対する全体の優越性を主張し、全体は部分の算術的総和以上のものであるとする考え」だと記していたが（cf. 小稿、註1）、カントが「純粋理性の建築術」（B860f.）として提示した学問体系はもちろんホーリズムの構造をそなえる。法廷理論的カント解釈を試みた石川文康が説明するところ、「『建築術的』とは、全体の理念が部分に先行し、各部分がたがいに他のあらゆる部分のためにあり、結果的に全体のためにある体系を特徴づける術語である」[25]。福谷が「全体の理念」を『純粋理性批判』の主導概念とみなし、カント内在的に解釈を遂行するのも（『試論』、二六～二九頁）、カントが「純粋理性の建築術」を提唱したからであった。じっさい、そうした建築術のなかで判断、概念、理性、悟性、構想力、図式、感性の機能それぞれにそなわる全体性やこれらが連関する体系性が指摘され、それらを欠く事柄は「寄せ集め」や「ラプソディ」と特徴づけられた。カントやキーゼヴェッターの著作を通じてクラウゼヴィッツも知りえた事柄である。

「われわれの認識すべては感官から始まり、そこから悟性へと進んで理性で終わる」（A298 / B355）が、悟性と感性の協働が語られる「真理の論理学」ではこう説明される。

今や経験は諸現象の綜合的統一にもとづく。つまり、諸現象一般という対象にかんして諸概念に従って綜合することにもとづく。この綜合なしには経験は決して認識にならず、諸知覚の或

25　有福孝岳ほか編『縮約版　カント事典』（弘文堂、二〇一四年）の一六〇頁を参照。併せて石川文康『カント　第三の思考：法廷モデルと無限判断』（名古屋大学出版会、一九九六年）の付論「カントの体系論」参照。

るラプソディであろう。すなわち、諸知覚は一貫して結合された（可能的）意識の諸規則に従う脈絡いずれにおいても、したがって統覚の超越論的で必然的な統一のいずれにも全体的に適合しないであろう。（A156f. / B195）

「さて、或る主観にあって多様の統一は綜合的だが、それゆえ、純粋統覚は可能的直観すべてにおいて多様を綜合的に統一する原理を供与する」（A116）のに対し、純粋統覚の綜合的統一を欠くと、諸知覚が乱れる酩酊のごとき「ラプソディ」となる。

また「仮象の論理学」においてカントが「理性の理念」と「感性の図式」の違いを説明するに、「すなわち、理性の図式に悟性概念を適用することは（カテゴリーをその感性的図式に適用する場合のように）対象そのものを認識することでさえなく、悟性使用すべてを体系的に統一する規則あるいは原理にすぎない」（A665 / B693）。

カテゴリーを感性化した図式もまた、想像力が図式をもちいて具体的にイメージできる範囲を規定する「規則」（A141 / B180）であったが、図式の類比物である理念は、理性が統制的に使用して「悟性使用すべて」を統一し、その可能的範囲を画定する規則である。

本節まではカント『純粋理性批判』の全体構制に対してクラウゼヴィッツが理論的にもちえた可能的関係の確認であった。

三　カントのプラグマティック・ホーリズム

つづいて、カント『純粋理性批判』のプラグマティック・ホーリズムとハイデガー『存在と時間』が提示した環境世界のプラグマティック・ホーリズムの理論的関係を確認し、そのうえでカント主義者クラウゼヴィッツ『戦争論』がそなえうるプラグマティック・ホーリズムの可能的内実を現象学的解釈学の観点から見定めなければならない。

現象学者の門脇俊介がその著作『理由の空間の現象学：表象的志向性批判』（以下、『理由』と略記）で説明するところ、「一つの志向性が、何らかの推論上の役割をその内部で果たす全体論的なまとまり」を「理由の空間（the space of reason）」と呼び、それは「そこで行為や主張の理由が与えられ、受け入れられ、問われるような規範的な空間」である（『理由』、十四頁）。人びとのあいだで理由を与え、受け入れ、問いあう「人間を単なる物や自然と区別するものは、人間の意識の内面性にあるのではなく、むしろ他者とのあいだで、あるいは自己自身との対話のうちで、このような『理由の空間』を形成しうるという点にある」（『理由』、十四頁）。理由の空間は、諸事象を解釈的に了解する人間たちに開かれた社会的空間である。

「理由の空間」を、現代の表象主義2が構想するような形でとらえ始めたのは、カントであろう。カントは、この世界の対象の成立の可能性の制約が概念的認識である判断の正当化の可能性の制約であるとみなすことによって表象するものと表象されるものとの関係を、判断（命題を真とみなすこと）と概念（規則）による統一との関係として一新した。（『理由』、十五頁）

カント『純粋理性批判』の批判哲学は超越論的哲学にして判断論だが、「表象主義2は、文や命題を表象することの最小単位として導入することによって、信念や意図を含んだ『志向性の体制』

を、表象することを可能にするシステムとして考察するように導かれている」(『理由』、七頁)。

とはいえ、門脇がそれなりにブランダム的に指摘するところ、第一に「ある命題を真であるとみなすこと、すなわち信念という命題的態度は、真であるとみなすことによって**世界内の何らかの状況を引き受け**ることであり、そうした命題を表明することは、**命題の正当化の責任を引き受け**るという意味でのコミットメントをなすことである」(『理由』、八頁)。人それぞれ、状況それぞれに千差万別の解釈学的負荷を受けるなか、人間は「命題の正当化」を行なうわけである。たとえば或る中学生は教室で「これは数学のプリントだ」と言って同級生たちに配布する日直〈として〉、担任教師にそう言われてオーソライズされた言明=命題をみずから引き受けて自分自身のなかで再文脈化するが、「命題的態度」は、こうして正当化の責任をみずからわかちもつ規範的関与の一部である(*Tales*, p. 317f., vgl. *SZ*, S. 318)。ただし、「第二に、そのような志向性のコミットメントが可能であるためには、志向性が単独で生起するのではなく、志向性同士の全体論的な体系の一部をなしていることが必要である……」(『理由』、八頁)。ドレイファスなら、門脇的カントの表象主義2を「理論的ホーリズム」の一種に分類するだろう[26]。

門脇のこうした存在論的カント解釈を参照して言えば、カント的なプラグマティック・ホーリズムは、「反表象主義的な」プラグマティック・ホーリズムの派生態あるいは欠如態である。

「事実的現存在が第一次的かつ支配的に存在する仕方として『実践的な』配慮が見定められる、まさにそのとき、『理論』にその存在論的可能性があるのは、実践の欠落、つまり、或る欠如態のおかげだろう」が(*SZ*, S. 357)、「物在性」が環境世界における「用在性」の端的な欠如態であることはむしろ珍しく、つまり、「道具の使用を控えるとすでに『理論』になっていることは稀で、じっと『観察する』目配りは配慮されて手元にある道具にすっかり囚われたままである」かぎり(*SZ*, S. 358)、用在性と物在性が絡みあうなかで物在性は用在性の派生態となることが主立っている(*Tales*, p. 318)。こうした解釈的で情態的な了解を対象認識〈として〉遂行する現存在はみずからを認識主観〈として〉了解しながら、存在者を志向し、客観〈として〉認識する。門脇はこう述べる。

『存在と時間』(一九二七年)のハイデガーは、道具と交渉する日常的な人間の活動を貫いているのは、命題的な表象抜きのより根源的な志向性――ハイデガーの言葉では「超越(Transzendenz)」と言うべきだろう――だと考え、表象主義的な志向性は、この根源的な志向性が欠損したときに生ずる例外的な状態であるだけではなく、何らかの根源的な志向性を背景にしうる派生的な志向性だという、反表象主義的な見方を展開した。(『理由』、九頁)

こうして理論的ホーリズムの「表象主義的な志向性」を担うのが認識主観であり、表象主義2と特徴づけられたカント『純粋理性批判』のプラグマティック・ホーリズムは、反表象主義的なハイデガーの環境世界概念におけるプラグマティック・ホーリズム

26 ドレイファスは、「観察の理論負荷性」(N・R・ハンソン)などに見られる現代科学哲学の「理論的ホーリズム」との対比から、ハイデガーの用具連関を「実践的ホーリズム」として特徴づける。Cf., Hubert. L. Dreyfus, "Holism and Hermeneutics", in: *Review of Metaphysics 34*, September, 1980, pp. 3-23.

の派生態あるいは欠如態であった。

そのかぎり、カント主義者クラウゼヴィッツが戦争を社会的実践として考察し、「その成り立ちはプラグマティック・ホーリズムだ」と見定めたとき、クラゼヴィッツのそれは、ハイデガーのプラグマティック・ホーリズムに近しいものでありえた。エマニュエル・レヴィナスは「ハイデガーの著作にあって、現存在は飢えることが決してない」[27]と批判していたが、とはいえ、戦争の内的脈絡のなかで生きる現存在たちは兵士〈として〉空腹を覚え、毎日の食事をくりかえす。それは、兵士〈として〉その務めを果たす〈ため〉であった。戦争に必須の「ロジスティクス」は、カント倫理学で論じられた目的手段連関の存在論的解釈がふくまれるハイデガー的カントのプラグマティック・ホーリズムと対照することでむしろその存在論的構造が解き明かされるわけである[28]。

以下、カント『純粋理性批判』において全体概念が論じられた様子をカント内在的に確認するが、これは、クラウゼヴィッツがカント批判哲学を理解しえた可能的範囲を提示するためである。

「……現象すべての絶対的全体は一つの理念にすぎない」ので(A328 / B384)、「こうして超越論的理性概念である理念によってはいかなる客観も規定されえないとしても、これらの理念は根底において気づかれることなく、悟性の拡張された整合的使用の基準として悟性の役に立ちうる……」(A329 / B385)。このように「理性は悟性の使用のみに関係づけられるが、……それは悟性に命じて或る種の統一へと方向づけるためである」(A326 / B383)。理性は「現象すべての絶対的全体」という超越論的理念を統制的に使用し、悟性が現象にかかわりうる可能的経験の範囲を画定する。これが『純粋理性批判』で行なわれたカントの仕事である。その目的は、悟性が感性的直観を介して現象にカテゴリーを適用し、アプリオリな綜合判断を形成する仕組みを説明し、「アプリオリな綜合判断はいかにして可能か」という問いに答えることであった。

スコットランドのカント学者ノーマン・ケンプ・スミスは『『純粋理性批判』註解』第二版(*A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*, 2nd edition, 1923, 以下、*Commentary*と略記)で判断形成に必須のカテゴリーに注目し、次のように説明する。

すなわち、カテゴリーは或る可能的判断の一つの述語とはみなされえないし、また独立に覚知された主語に適用されるものとはみなされえない。カテゴリーの機能は判断を一つの全体として分節することである。実体と属性のカテゴリーは、たとえば定言判断の形式であり、判断の単なる部分部分のどれか一つと等置されてはならない。(*Commentary*, p. 335)

「思考は概念による認識である」(A69 / B94)と同時に「思考すべては判断である」が(*Commentary*, p. 191)、悟性に固有で経験に由来しない概念の「カテゴリーと判断作用との不可分の連関」を認めた結果、「カントに根本的なコペルニクス的発見、すなわち、カテゴリーは綜合の形式であり、したがって機能あるいは関係を表現しているという発見」がなされた(*Commentary*, p. 191)。そうであるかぎり、カテゴリーは主語概念に対する述語概念の内容を指すのではなく、たとえば、「実体と偶有性」のカテゴリーにおける

27 Emmanuel Lévinas, *Totalité et infini, Essai sur l'extériorité*, Kluwer, 1988 (1961), p. 142.

28 拙著『超越のエチカ：ハイデガー・世界戦争・レヴィナス』(ぷねうま舎、二〇一五年)の第六章「凡庸な悪とその日常性」を参照。

「実体と属性との超越論的区別」(*Commentary*, p. 195) のような関係を通じて「判断の内容全体が組織化されるさいのその関係を表現する」(*Commentary*, p. 343)。このなかでたとえば実体のカテゴリーはその図式が「時間における内実的なものの持続性」(A144 / B183) という意味をもち、可能的概念すべての合理的脈絡のなかで綜合的で比量的な悟性がカテゴリーを現象に適用する。実体と偶有性のカテゴリーは、こうして現象に対して客観的に妥当しうるようになる。

『純粋理性批判』「超越論的分析論」で示された学知の「完全性」は、カテゴリーなど悟性概念の諸々を「全体という理念」に照らして区別しながら「一つの体系において脈絡づけ」、統一することに存する (A64 / B89)。こうしてカテゴリーという規則十二個は同じ「純粋悟性概念」として内的脈絡を形成し、そのなかで互いに差異化された個別的意味をもつ。判断全体を綜合的に分節化するカテゴリー十二個もまた、体系的全体性をなすわけである。このことをふまえ、スミスは注目すべき指摘をしている。

こうして「辰砂は重い」という命題において実体と属性のカテゴリーはどの意味でも述語ではない。カテゴリーは判断全体を分節し、経験内容を実体と属性という二重的関係の観点から**解釈している** (interpret)。(*Commentary*, p. 343)

強調しておくと、カテゴリーによる或る判断全体の分節的綜合は「解釈」だ、そうスミスは指摘するわけだ。

「辰砂は重い」という「経験判断」にせよ (A100f.)、アプリオリな綜合判断にせよ、その指摘は共通して当てはまる。わけてもアプリオリな綜合判断の場合、「純粋悟性の図式機能」(A140 / B179) によって時間表象一般のいくつかへと感性化される諸カテゴリーが織りなす体系的全体性のなかで人間は超越論的主観〈として〉或る物理現象一般を実体と属性の関係〈として〉解釈し、アプリオリな綜合判断が形成される。

「超越論的図式論」でカントは、「可能的経験一切という全体のうちには、とはいえ、われわれの認識すべてが存する……」(A146 / B185) と述べていたが、可能的経験の全体を、アプリオリな綜合判断がその原理となって担うことを保証するのは、カテゴリーの全体性に加え、時間にそなわる全体性であった (『試論』、十三頁)。

一方で一なる全体性として形式的に純粋直観された時間と空間は「与えられた無限量として……一つの想像的存在者 (ens imaginarium) である」(B347)。この一なる時間全体を制限してまとめた時間表象一般のなかで、つまり、「さまざまな時間」が連なるなかで何かが継起的に存在し、あるいは「同一の時間」のなかで何かと何かが同時的に存在する (A30 / B46)。一なる全体性としての時間は、これら時間表象一般を可能にする地平的全体性である。こうして対象を直観して受容された具体的な〈いつ〉や時間形態の〈いかに〉とを可能にする時間表象一般とカテゴリーとが超越論的図式に媒介されるが、この媒介を超越論的判断力の包摂機能から特徴づけるとき、実はカント『純粋理性批判』のプラグマティック・ホーリズムが際立ってくる。

米国カント学の大家ヘンリー・アリスンが『カントの超越論的観念論：解釈と擁護　改訂増補版』(*Kant's Transcendental Idealism, An Interpretation and Defense, Revised and Enlarged*, 2004, 以下、*Idealism* と略記) の第八章「悟性の図式機能と判断力」でパラフレーズするところ、「規則の能力」(A132 / B171) の悟性は「規則を定式化し把握する」が

(*Idealism*, p. 205.)、「規則のもとに包摂する能力」(A132 / B171)である判断力は「個々別々のケースに規則を適用する」(*Idealism*, p. 205)。たとえて言えば、チェスの「規則と目的」を把握する能力が悟性であり(*Idealism*, p. 205f.)、これに対して「良手の定石」を学んでその規則をうまく使いこなす能力が判断力である(*Idealism*, p. 206)。この構図において「カントの関心は、それゆえ、後者の〔判断力による〕包摂がそのキャパシティを成功裏に使用する諸条件にある」(*Idealism*, p. 205)。アリスンの解釈によれば、この「諸条件」はカテゴリーではなく、それゆえ、現象へのカテゴリーの客観的妥当性が問われた「形而上学的演繹論」と「超越論的演繹論」とで明らかにされたこととは別に、「超越論的図式論」[29]がおかれた「判断力の超越論的理説」に固有の問題であった。こう説明される。

後者の〔判断力による〕包摂は、われわれが確認してきたように、諸表象の綜合を妥当させる規則の提供をカテゴリーが行なうという意味で認識論的条件である。こうしたカテゴリーが件の綜合(あるいは判断)の規範的主張を根拠づけるさい、依拠するのは**他人たちの同意**である。したがって、判断のキャパシティを活用する諸条件はまた〝妥当条件〟として記述されうる。とはいえ、ちょうど客観的妥当性が真理と等価ではないように、綜合あるいは判断の規範的要求との一致は、判断の真理を保証するわけではないが。(*Idealism*, p. 205)

スミスによれば、カテゴリーで判断全体を綜合的に分節することは「解釈すること」であり、またアリスン本人は、経験概念を考察する場面とはいえ、「再認の能力は解釈的だ」(*Idealism*, p. 209)と指摘し、この「解釈的再認」は、ハイデガーの解釈によれば、その地平としてカテゴリーによる解釈的な「予―認(Prae-cognition)」をはらんでいた(vgl.『カント『純粋理性批判』の現象学的解釈』、*GA25*, S. 364)[30]。こうしたカテゴリーの現象への客観的妥当性は、最終的には解釈

29 「超越論的演繹論が形而上学的演繹論にもとづいて想定するのは、われわれは一揃いの諸概念を所有し、これらは少なくとも〝論理的使用〟をもつことである」が(*Idealism*, p. 203)、「超越論的演繹論が扱う問題は、一揃いの諸概念は論理を超えた使用あるいは〝内実的な(real)使用〟をもつか否か、つまり、現象への適用をもつか否かである」(*Idealism*, p. 203)。「超越論的演繹論では、カテゴリーの論理的使用ではなく、客観への内実的な使用が問われるから、**三重の綜合**が扱われる」(*Idealism*, p. 203)。これに対してアリスンが強調するところ、「図式論が告げる問題は、カテゴリーは現象に適用されるか否かではなく(この問題は演繹論で扱われる)、カテゴリーはいかなる(感性的)条件のもとで適用されるか、このことである」(*Idealism*, p. 203)。「しかも、〔図式論の〕この問題は完全に筋が通っており、だいたいは演繹論で提起されていない」(*Idealism*, p. 203)。アリスンが『レフレクシオン』から引用するのは以下である。「図式論が示すのは、現象が論理的機能の観点から規定されるときのその条件であり、それゆえ、現象がカテゴリーのもとにあるときのその条件である」(R5133, 18; 392, cf. *Idealism*, p. 203, *Commentary*, p. 354, note 1)。

30 スミスはカテゴリーと時間とを媒介する図式を不要視し、カテゴリーが的に解釈された直観が図式と呼ばれるにすぎないと述べる(cf. *Commentary*, p. 335f.)。これに対してアリスンは、図式をはらむ概念は経験概念と純粋感性概念にかぎられると言い(cf. *Idealism*, p. 208)、カテゴリーが「超越論的時間規定」によって時間と媒介される必要性と(*Idealism*, p. 213)、「超越論的図式論」に固有な問題とを指摘する(*Idealism*, p. 203)。

ただし、一方でスミスは現象へのカテゴリーの適用をカテゴリーによる或る判断全体の解釈とみなし(cf. *Commentary*, p. 343)、アリソンは他方、三重の綜合における再認の綜合を解釈行為とみなしている(cf. *Idealism*, p. 209)。解釈は何かを何か〈として〉了解する広義のアスペクト知覚と言いうるが、そのアスペクトとは図式のことだから、カテゴリーが図式機能と連係しなければならない場面は両者とも同じである。何かを何〈として〉解釈することは純粋悟性のカテゴリー使用のどこかに図式機能を認めることになる。このあたりのことにかんしては、拙稿「カテゴリー、純粋直観、図式:全体性の諸相にそくして」(東北哲学哲学研究会編『思索』所収、五三号、二〇二〇年)を参照。

的再認あるいは解釈的予認の綜合の次元で「他人たちの同意」を必要とする。つまり、客観的妥当性をもった認識判断として私が発話しても、その判断の正当化は私一人ではなされずに聞き手にも委ねられ、聞き手の同意が必要だが、このとき、聞き手による同意は解釈的再認あるいは解釈的予認を通じて形成された認識判断の「指意（Bedeutung）」と「意味（Sinn）」への潜在的同意をふくみ、判断力によって個別的現象を規則的概念に包摂することの妥当性もまた、発話者と聞き手の非対称的関係のなかで聞き手による潜在的同意をふくんでいる）[31]。

こうした潜在的同意は、「どのように私は或る規則に従いうるのか」と問われたときに「そうして私はとにかく行為する」と答えるしかなく、同時に他人たちから「そうなんだね」と肯いてもらえたとき、さらに言えば、他人がレスポンスしてしまったときに成り立つ社会的実践が依拠する「岩盤」の次元でなされる[32]。

拙稿「カテゴリー、純粋直観、図式」で論じたことだが（cf. 小稿、註30）、小稿にかかわるその要点を言えば、経験判断にせよ、アプリオリな綜合判断にせよ、三重の綜合それぞれは、概念的統一による対象の解釈的な「再認」および「予認」、概念の図式＝アスペクトに限定された範囲での親和的な「再生」、知覚の秩序で表層的な「把捉」を指した。ここで強調すべきは、スミスが〝Recognition（再認）〟を〝reidentification（再同定）〟と訳出し[33]、ハイデガーも再認を「同定（Identifizierung）」概念とみなした点である（*GA25*, S. 364, SS. 361-364）。この同定を可能にするのが予認であった（vgl. *GA25*, S. 364）。ハイデガー的でアリスン的なカントの『純粋理性批判』では、「ジャストロー図」[34]をウサギ〈として〉見るとき、解釈的再認の綜合では概念とその図式によってウサギの「指意（Bedeutung）」と「意味（Sinn）」が共に同定されるが、この同定が可能であるのも、何かをそもそも対象〈として〉解釈的に了解することを可能にする「対象性」の存在論的地平を解釈的予認の純粋綜合があらかじめ形成していたからである[35]。

31　悟性と判断力の違いをアリスンはチェスを例に説明する。まず、「ゲームをクリアに理解するために必要なのは、ゲームの諸規則とゴールを把握することである」が（*Idealism*, p. 205）、「こうした諸規則はどのような動きが規則に合っているか、つまりは〝チェス的に可能〟かを規定し、ゴールは諸規則が何のために立てられているかという目的を規定する」（*Idealism*, p. 205）。「それゆえ明らかなのは、もしこうした知識がなければ、ひとはまったくチェスで遊ぶことができないだろうということである」（*Idealism*, p. 205f.）。「しかしながら、上手い指し方の知識は、カントの術語で言えば、〝普遍のもとへの個別の包摂〟（つまり、ゲームの規則によるチェス的に可能な〔駒の〕動き諸々のセットの規定）、こちらをふくむ判断力にかかわることである」（*Idealism*, p. 206）。

アリスンのこうした説明をヴィトゲンシュタイン『哲学探究』に差し戻して説明可能である。つまり、二を加えていく「数列」を「一〇〇〇以上の数」で生徒に書かせたときに、その生徒が「一〇〇〇、一〇〇四、一〇〇八、一〇一二」と書いたケースのように（L. Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, § 185, p. 80f.）、悟性的規則のレベルでは、別の悟性的規則でチェスの駒を動かしているやもしれず、対戦者二人は、われわれが生きるこの世界で通用している同じ悟性的規則で、まずはチェスを指さなければならない。こうして共有された規則に照らしながら、指し方の上手い下手が問われるが、これが判断力の問題にあたる。悟性と判断力による規則使用のこうした階梯をふまえれば、判断力による「普遍のもとへの個別の包摂」の仕方を確かめることで、共有された悟性的規則にもとづいた包摂か否かも明らかになりうると言える。

32　L. Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, § 217, p. 91.

33　*Immanuel Kant's Critique of Pure Reason*, translated by Norman Kemp Smith, Palgrave Macmillan, 1929, p. 102.

34　L. Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, § 118, p. 204.

35　拙稿「カテゴリー、純粋直観、図式」の第二節「想像力、綜合、図式」を参照。

さて、日直の中学生Aさんは、B先生から「次の授業ではウサギの絵を描く」と言われ、ジャストロー図のプリントの束を手渡される。AさんはB先生の言葉をクラスメートたちに伝え、そのプリントを配布するが、AさんはB先生によるアスペクト知覚とその言明の正当化を受け取り、この正当化を権威としてもちい、クラスメートたちに伝えている。ブランダム流の理解である。これに対してアリスンの場合、Bさんが解釈的再認の綜合において意味と指意を形成し、ジャストロー図をウサギ〈として〉解釈的に再認しつつ、たとえば「この図はウサギだ」と述べるさい、物おじしないAさんが「先生、アヒルですよ」とB先生に言わず、B先生の発話内容を理解し同意した点を強調する。言葉のやりとりは、自己他者間で自動的なものではなく、聞き手の応答を待って言葉や判断の指意や意味が正当化されるかぎり、非対称的な自己他者関係に根差すわけである。

翌日、社会科でキャラクター商品のミッフィがどう売れているかを説明する発表のさい、Aさんがユニークな事例としてジャストロー図を例示する。「概念の図式が当の概念をめぐる想像力の限界と見做しうる」（守屋）かぎり、聞き手のクラスメートたちにはまずジャストロー図をウサギ〈として〉見てもらい、「それはアヒルだ」というアスペクトの閃きが起きないようにする必要がある。つまり、Aさんは判断力をもちいてジャストロー図という具体的特殊＝感覚与件をウサギという概念的規則へと包摂する仕方と範囲とをうまく使いこなし、ジャストロー図を「横になって寝ているミッフィ」〈として〉見てもらう説明を行なわなければならない。

ふりかえれば、ハイデガー的アリスンはさまざまな認識判断における「現象へのカテゴリーの客観的妥当性」を確証するさい、再認や予認、包摂の次元で他人たちの潜在的同意という非対称的自己他者関係への「依拠」を指摘していた。「超越論的主観性とは何か」、そして「超越論的な相互主観性は成り立ちうるのか」という問題は残るが、解釈的再認あるいは解釈的予認の綜合と解釈的カテゴリー使用のうちに広義のアスペクト知覚である解釈の機能を認めるかぎり、私が認識判断をあなた（たち）に発話して伝達するさい、互いに超越論的主観〈として〉潜在的にも「理由の空間」へと参加するなか、解釈的再認あるいは解釈的予認の綜合と解釈的カテゴリー使用の妥当性は、いずれかのタイミングで非対称的な自己他者関係のあいだで正当化される。

アリスンは判断の真偽ではなく、判断として表現された認識における現象へのカテゴリーの客観的妥当性がもつ規範的意味を問うていたけれど、それは、物理的世界における対象認識とその正当化という行為もまた、超越論的主観性の次元までをもふくむ多重的な社会的実践だからであった。

ブランダムは、みずからの認識判断を正当化してオーソライズする認識主体が現象への概念の妥当性に対して責任をもつことが問われるようになった「規範的転回」をカント批判哲学の功績として認めながらも（*Tales*, p. 21）、相互主観的に規範の権威性を形成する社会性一般の考察が「カントの規範的合理主義」には欠けると指摘したが（*Tales*, p. 31）、しかしながら、アリソンはそう考えてない（*Idealism*, p. 205）。なぜなら、現象へのカテゴリーの客観的妥当性にかんして非対称的自己他者関係のなかで潜在的に他人たちか

ら同意されることはすでに、解釈的予認および解釈的再認とカテゴリーの解釈的使用のプラグマティック・ホーリズムのなかで行われているからであった。

クラウゼヴィッツが『純粋理性批判』や『実践理性批判』『人倫の形而上学の基礎づけ』、『判断力批判』を読んでいたのか否か、あるいはキーゼヴェッターの著作や講義によるカント批判哲学の紹介をどれくらい理解していたのか、それは最終的にわからない。[36] とはいえ少なくとも、カント的なプラグマティック・ホーリズムの地平でクラウゼヴィッツは『戦争論』を書きえた可能性は、広義のカント学の側からも言えることである。

＊

本節の最後に、福谷が『純粋理性批判』に体系的統一をもたらすと指摘した「全体という理念」が、クラゼヴィッツ『戦争論』で使用される様子をあらためて確認しておく。こう言われていた。

「われわれが今日おそらくは主張可能であるのは、戦争はたいてい、有機的全体のように考察されなければならず、この有機的全体からは個々別々の部分は分離されえず、それゆえ有機的全体においてどの行為もその全体と一緒に集合し、こうした**全体という理念**から出発しなければならないということである」（*Kriege*, S. 333／三四二頁）。

「全体という理念」は、キーゼヴェッターが『カントの基本原則にもとづく一般論理学概要』第二六九節のなかでその一般論理学の体系的認識を説明するさい、くりかえし強調していた事柄であった。

四　絶対戦争、制限戦争、政治

番号を付して引用するが、クラウゼヴィッツはこう問う。

①戦争とは何か。②目的と手段は戦争でどう働くのか。③現実性の逸脱にあって戦争はその根源的に厳密な概念と多かれ少なかれどれくらい遠ざかり、あれこれと遊動するのか。とはいえ、つねに或る最高原則であるような、その厳密な概念のもとにあってのことだが。（*Kriege*, S. 61f.／66頁）

最初の問いは①戦争の本質を、二番目の問いは②戦争の目的手段連関にそなわるホーリスティックな構造とプラグマティックな作用、その効果を、最後の問いは③有限的現実における制限戦争の概念を照らしだす絶対戦争という統整的理念を吟味しようとしている。これらの問い三つによる相互連関が重要である。

「戦争はそれゆえ、われわれの意志を実現するために敵対者に強制する暴力行為である」（*Kriege*, S. 17／二二頁）という一般的規定[37]と「……戦争は〔外交などと〕異なる手段をもちいて延長された

36　パレット『クラゼヴィッツ』の二二二頁以下、二三五～二四七頁を参照。

37　クラゼヴィッツの「意志」概念は、一九三九年に出版され、クラゼヴィッツ「改釈」に紙幅を割いたヴァルター・M・シェリング『戦争哲学』全体を主導すると同時にこれを通じて示された「哲学する意志」概念とは異なり、限定されたものである。シェリングの場合、「哲学的概念の内実は現実性であり、哲学的概念の実質は行為する人間の意志である」が、「内実と実質の両者は意志からのみ、それゆえ、行為によってのみ概念把握されうる」（Walther M. Schering, *Wehrphilosophie*, J.A. Barth, 1939, S. v）。シェリングの意志概念とナチスの意志概念の共通性と差異にかんする考察は機会を改めたい。

国家政策（Staatspolitik）である」という「実際的」規定の観点から言えば（*Kriege*, S. 9 / 十四頁、vgl. S. 39 / 四四頁、S. 41 / 四六頁、S. 329 / 三三八頁）、クラウゼヴィッツの時代、「敵すべての殲滅」を物理的に完遂する絶対戦争は現実で構成的に使用することが不可能な統整的理念であって[38]、政治性なき純粋戦争は、それゆえ、現実の政治目的を達成する手段になりえない。そのかぎり、①「戦争とは何か」という問いは、③「最高原則」となるような「根源的に厳密な概念」、つまりは統整的理念の絶対戦争に照らして多種多様な制限戦争を考察することになる。現実ですでに勃発し、あるいは勃発の可能性がある／ありえた制限戦争と理念的究極態である絶対戦争の全体構造が、②プラグマティック・ホーリズムであった。

「戦争はその本来的な意味で戦闘だが、それは、戦闘が広義で戦争と呼ばれる多様な活動態のなかで唯一実際的な原理（das wirkliche Prinzip）だからである」（*Kriege*, S. 101 / 一〇六頁）。

「原理」は「アルケー（ἀρχή）」に由来し、哲学にあって万物の始まりにして元素を指すが、カントの場合、理論理性は悟性使用すべてを体系的に統一する原理の能力であった。クラウゼヴィッツの場合、原理である戦闘が織り糸に喩えられるかぎり、やはり戦争の構成に必須の元素という意味である。問題とされた戦闘の効果だが、この効果／非効果にもとづいて多種多様な状況が新たに作りだされ、それが脈絡となると同時に、この脈絡のなかで戦闘一つ一つの意味が決まる。

「さて、交戦にあって行動すべては敵対者の殲滅（Vernichtung des Gegners）あるいはむしろ敵対者がもつ戦闘力の殲滅へと方向づけられているが、それは、こうした方向づけが交戦概念のうちに存しており、したがって敵戦闘力の殲滅はつねに交戦の目的を達成するための（um zu）手段だからである」（*Kriege*, S. 54 / 58頁）。こうした目的手段連関を織りあげる糸が交戦であった。

われわれは戦争にあってただ一つの手段しかもたない。それが交戦（*Gefecht*）だが、とはいえ、この交戦を使用する多様性のもとでわれわれをさまざまな道すべてへと招き入れるのもその交戦である。こうした交戦使用の多様性を目的の多様性は許容しており、その結果、われわれは何も勝ち取っていないように見えて、しかしそうではなく、というのも、手段のこうした統一性に発する一本の織り糸は、考察してみると、戦争活動態（kriegerische Tätigkeit）という織り布すべてによって継続して編みあわせられ、かつ、この織り布をまとめ保つからである。（*Kriege*, S. 56 / 六〇頁）

戦争の目的にかんしてクラウゼヴィッツが説明するところ、「とはいえ、われわれは敵戦闘力の殲滅＝無化（Vernichtung）を戦争で追求される目的の一つとして考察してきた」（*Kriege*, S. 56 / 六〇頁）。敵戦闘力の無化は敵すべての物理的殲滅や駆逐、武装解除

38　川村康之「クラウゼヴィッツ『戦争論』とは何か」によれば、「……『二種類の戦争』のうちの『絶対戦争』は、戦争が純粋な姿をとる（現実には起こり得ない）理念上の戦争」（清水多吉、石津朋之編『クラウゼヴィッツと『戦争論』』、第八章、彩流社、二〇〇八年、六三頁）、つまり、「暴力の無制限の行使にいたるような『理念的』戦争」であり（『クラウゼヴィッツと『戦争論』』、六八頁）、「……一方の側による他方の完全な打倒に終わる絶対的な暴力の行使である」（『クラウゼヴィッツと『戦争論』』、七〇頁）。

『全体主義の起源』を思想史的主著として残したハンナ・アレントは、哲学的主著となりえた草稿『政治入門』で「今日でさえ、トロイアに対するギリシアの戦争は、……おそらく絶滅戦争の原型だといまだ考えられている」と指摘していたが（Hannah Arendt, Introduction into Politics, in: *The Promise of Politics*, Edited by Jerome Kohn, Schocken, 2005, p. 162）、とはいえ、『イリアス』というホメロス文学の話である。

などいくつかの種類があろうけれど（*Kriege*, S. 44/四九頁）、資源獲得の侵略戦争や敵の侵攻に対する防衛戦争などを政治目的に照らし、敵戦闘力の多種多様な無化＝殲滅が勝利とみなされる。勝利という軍事目的にむけて戦争は戦闘を織り糸として編まれた織物であり、この織物は、図柄、素材、品質の違いによって見分けられるが、この区別をふまえ、多種多様な制限戦争が政治目的の違いによって使い分けられる。

「……実際の戦争は、戦争概念に従うべく首尾一貫して極限的なことに向かう試みではなく、中途半端でそれ自体矛盾しているので、実際の戦争そのものは戦争に独自の法則に従うことができず、或る別の全体にふくまれた部分として考察されなければならず、この全体が政治である」（*Kriege*, S. 330/三三九頁）。

レクラム文庫版『戦争論』の編者ウルリッヒ・マールヴェーデルが解説するように、クラウゼヴィッツは「戦争をあらゆる**社会関係**の包括的な領域のなかに位置づける」[39]が、有限的現実の制限戦争を包括する上位領域が政治となるわけだ（vgl. *Kriege*, S. 333/三四二頁）。

小稿では、**一方で**政治は制限戦争より上位にあるという視点から『戦争論』内在的にテキスト解釈の整合性を確かめることを原則とし、クラウゼヴィッツが場合によっては認めない哲学的観点にかんしては受容可能な範囲にとどめ――すなわち、戦争遂行の具体的方法を指示する哲学は拒否し――（vgl. *Kriege*, S. 13/十八頁、S. 290/二九八頁、S. 329/三三七頁）、そうした整合的解釈を試みてきた。

39　日本クラウゼヴィッツ学会訳『戦争論』（芙蓉書房出版、二〇〇一年）の「訳者あとがき」の三九四頁を参照。

併せて『戦争論』のうちに現代哲学的含意を見こんでもいる。

クラウゼヴィッツはこう述べている。

戦争の本性は個々人と利益社会的集合という別々の関心で分裂しながら成り立っているが、こうした分裂の両面それぞれにそくしてわれわれが今まで分裂を考察しなければならなかったのは、分裂の対立的契機を疎かにしないためである。こうした考察ののち、人間自身にもとづくがゆえに哲学的悟性では解決不可能な或る分裂に対してわれわれは統一性を求めるつもりだが、その統一性は実生活にあってこのように矛盾する諸契機を結びつけており、それは、この諸契機が部分部分で相互的に中立化するからであった。（*Kriege*, S. 329/三三七頁以下）

「この統一性は、戦争は政治的交渉の一部にすぎず、それゆえ、何ら独立的なことではないという概念である」（*Kriege*, S. 329/三三八頁以下）。「政治とは、国内統治（die innere Verwaltung）あるいは人間の利害すべてと、それ以外では哲学的悟性なら言語化可能なことを政治自体のなかに統一し、調整することである……」（*Kriege*, S. 332/三四一頁以下）。

だから、クラウゼヴィッツは他方で、絶対戦争に対する優位を政治に認めないこともある点に注目して『戦争論』を解釈し、その整合性を問うことも併せて行なっている。というのも、「仮に政治的視点は戦争と共にすべてが放棄されることを思考可能だとすれば、それは、戦争が純然たる敵対感情から生死をかけた闘争になる場合に限られるだろう」とクラウゼヴィッツは述べてもいるからである（*Kriege*, S. 332/三四一頁）。

「理論は戦争の変容可能性すべてを認めなければならないが、

とはいえ、戦争の絶対的形態を最上位において普遍的照準点として使用することは理論の義務である……」（*Kriege*, S. 292／二〇〇頁）。つまり、絶対戦争概念はその統整的使用が必須である。

重要なのは、こうしてカント主義のもと、両者を照らしあわせてテキスト解釈の哲学的整合性を高めていくことにある[40]。

さて、一切の政治性なく「戦争が純然たる敵対感情にもとづいて生死をかけた闘争になる場合」とは、「概念どおりの極限の暴力」が敵国軍すべてを物理的に殲滅する絶対戦争のことであった。ただし、これは敵戦闘力の殲滅＝無化という概念を理性的推論で究極化した事態であり、絶対戦争という理念は可能的現実すべての制限戦争を照らしだすため、統整的に使用される。たとえば敵国軍を国内の或る地域から駆逐することを政治目的とする制限戦争の場合、敵すべてを物理的に殲滅する絶対戦争とその勝利は有限的現実の政治目的となりえないが[41]、政治性なき絶対戦争での勝利という統整的理念に照らして駆逐行動の意味は定められる。絶対戦争での勝利は敵すべての物理的殲滅を指すが、その内実は、時代的制約のなかでクラゼヴィッツに思考可能な仕方で規定される。たとえば、「戦争がナポレオンのもとで絶対的形態をとったケース」（*Kriege*, S. 291／二九九頁）はクラゼヴィッツをインスパイアした時代的事例となったが、ただし、そのナポレオン戦争さえ、クラゼヴィッツが考えても、戦争の純粋形態たる絶対戦争たりえなかった。

こうして統整的理念と有限的現実の対比にもとづき、絶対戦争と制限戦争、敵国軍すべての物理的殲滅とこれを除く敵戦闘力のさまざまな無化＝殲滅を特徴づけることが可能となる。とはいえ、絶対戦争や敵国軍すべての物理的殲滅がもたらす完全勝利は統整的理念にすぎず、現実化不可能であるかぎり、有限的現実の制限戦争は「或る全体の一部とみなされなければならない」し、「その全体が政治である」。

……戦争は、決して政治的交渉から切り離されえない。もし考察のなかで、この切り離しがどこかで起これば、関係諸々の織り糸すべては裂けちぎれ、意味も目的もないものが生まれる。（*Kriege*, S. 330／三三八頁以下）

「したがって、われわれが心得なければならないであろうことは、戦争をあるべきことのごとき端的な概念にもとづいて構成することではなく、戦争に混ざりこんで融合する異質的なことすべてにその位置づけを与えることであり、こうして異質的なこととして挙げられるのは自然な困難すべて、部分部分の摩擦、矛盾全体ゆえの摩擦、人間精神の不明瞭さや弱気であった」（*Kriege*, S.

40　歴史学的観点から石津朋之は、「事実、はたして本当にクラウゼヴィッツが政治の優位性を認めていたのかをめぐっては、今日でも歴史家の評価は分かれており、そもそも政治の優位性を示唆する『三位一体』といった表現も、『戦争論』で一度しか言及されていない」と指摘する（石津「政治と戦争：クラウゼヴィッツとデルブリュックを手掛かりにして」、防衛研究所、ブリーフィング・メモ、二〇一七年十二月号）。「三位一体」（*Kriege*, S. 42／四七頁、vgl. S. 189／一九五頁、S. 366／三七六頁）とその変容態にかんしては、併せて以下を参照。Beatrice Heuser, Introduction, in: *On War*, Carl von Clausewitz, translated by Michael Howard and Peter Paret, Oxford World's Classics, 2008, pp. xxvii-xxix; Colin M. Fleming, *Clausewitz's Timeless Trinity: A Framework For Modern War*, 2013, Routledge, Chapter 2.

41　絶対戦争の敵概念と制限戦争のそれとの異同は、『戦争論』のテキストに内在しての可能的概念の検討と、カール・シュミット『パルチザンの理論：政治的なことの概念に対する中間報告』の「絶対的敵」概念との外在的比較とによって考察されうる（vgl. Carl Schmitt, *Theorie des Partisanen: Zwischenbemerkung zum Begriff des Politischen*, 8te, korrigierte Auflage, Duncker & Humblot, 2017(1963), SS. 91-96）。

291f./二九九頁以下)。

あらためて確認すれば、『戦争論』の目的は戦争という「われわれの対象をなす個々の要素、次いでその対象をなす個々の部分や肢節、最後にその対象にそなわった**内的脈絡**における全体を考察すること」(*Kriege*, S. 17/二二頁)であったが、政治の内的脈絡全体のなかに有限的現実の制限戦争はふくまれる。「どの戦争も、政治的重要性と政治的関係からどのように生起するのか」(*Kriege*, S. 333/三四二頁)、それが問題である。

こうして敵国軍の駆逐から武装解除まで可能的現実で遂行可能な、敵戦闘力の多種多様な無化=殲滅は、装備の軍事予算や敵国への捕虜の返還可能性など、政治的文脈のなかで決まってくるかぎり、いっそうの解明を試みるべきは、戦争と政治の関係である。

つづく五では、存在論的カント解釈をふくむ超越論的ハイデガーのプラグマティック・ホーリズムを手掛かりに、『戦争論』における政治と戦争の関係を考察する。

五　クラゼヴィッツの現象学的解釈学

ここで考察されるのは、政治の内的文脈が限定され、制限戦争の内的文脈となる点である。ただし、制限戦争にまつわる諸概念である勝利、敵、講和などは、絶対戦争にまつわる統整的理念のそれらに照らして理解されるがゆえに、有限的現実の政治と統整的理念の絶対戦争が絡みあうなかで制限戦争の可能的現実とその成り立ちを見定めなければならない。

以下、番号を付して引用する。

仮に①戦争が純然たる敵意にもとづいて生死をかける戦闘であるなら、政治的視点が戦争と共にすっかり途絶えるという想定だけは可能だろう。〔とはいえ〕②戦争の現状は、これまで示してきたとおり、まさに政治それ自体の表出である。もし政治的視点を軍事的視点に従属させるならば、それは矛盾だろう。というのも、政治が戦争を産み出すからである。政治は知性だが、戦争は単なる手段で、その逆ではない。それゆえ、軍事的視点を政治的視点に従属させることだけがその可能性を保持する。(*Kriege*, S. 333/三四一頁)

すでに確かめたように①「純然たる敵意にもとづいて生死をかける戦闘」は統整的理念としての絶対戦争を指し、現実では生起不可能な事態である。クラウゼヴィッツが考えるところ、それは「純然たる敵対感情」に開示される事象であった。こうした「開示態(*Erschlossenheit*)」(*SZ*, S. 133)の存在論的構造を明らかにするため、ここでハイデガーの「情態性(Befindlichkeit)」概念を参照する(*SZ*, § 29)。『戦争論』第一編「戦争の本質」の第四章「戦争における危険について」と第五章「戦争における肉体的労苦について」などは、パレット『戦争を理解する:クラゼヴィッツと軍事力史への試論』で「兵士や司令官の心理学」と呼ばれたものだが[42]、ハイデガー的に言えば、まさに情態性の問題である(vgl. *SZ*, § 29)。小稿では、カント的なプラグマティック・ホーリズムを参照するハイデガーの環境世界概念を介して『純粋理性批判』のプラグマティック・ホーリズムとカント倫理学のプラグマティック・ホー

42　Peter Paret, *Understanding War: Essays on Clausewitz and the History of Military Power*, Princeton University Press, 1992, p. 114.

リズムの存在論的関係を考察し、これにもとづいて『戦争論』のカント的なプラグマティック・ホーリズムの成り立ちを解き明かすが、この解明のなかで第四章「戦争における危険について」と第五章「戦争における肉体的労苦について」とを「戦争内存在の現象学的解釈学」と「戦争における徳の現象学」として説明可能である[43]。

『存在と時間』解釈の定型的説明となるが、くりかえしておく。アリストテレスは『弁論術』で「怒り」を例にパトスの三契機を明らかにし、それは①怒りがむかう「相手（＝誰に、τινι）」、②怒るときの「心の状態（διακειμενου）」と③「何ゆえ（επι ποιοις）」であった[44]。このパトス論をハイデガーは独自に解釈し、恐れという情態性の三契機として、①「恐れがむかう先（das Wovor der Furcht）」、②「恐れること自体（das Fürchten selbst）」、③「恐れるさいに案じられるもの（das Worum der Furcht）」を挙げるが、この三契機は相即して働く。

現実世界にあって、たとえば小国Aの士官カールが大学生のころに友好国〈として〉遊学できた大国Bは今や敵国〈として〉小国Aに対峙する。この状況下、カールは斥候小隊長〈として〉B国の大軍が近づく足音を国境付近で聞きつけ、建物の裏手に隠れながら、その大軍を（vor）恐がる（mich fürchte）。遊学のさいに友好国軍のパレード〈として〉頼もしく思えたときのようにB国軍の行軍を見うるべくもなく、脅威の敵国軍〈として〉情態的に了解されるなか、私は危機的状況で大軍襲来に脅かされる自分を案じる（um）仕方で存在する。こうしてB国軍は恐るべき敵の大軍という「世界内部的存在者」〈として〉情態的に開示されると同時に、その状況に投げこまれて恐怖する自分もまた情態的に開示される。一般化して言えば、情態性の三契機でそれぞれ開示されるのは、①パトスのむかう先が他者、②パトスをもつこと自体が危機的状況、③パトスにおいて案じられるものが自分自身である。

こうした情態的で解釈的な了解の共開示構造は、純然たる敵対感情にも当てはまる。

クラウゼヴィッツが「戦争はまったき戦争、つまり、敵意というまったく制限されないエレメントだという仮定」（*Kriege*, S. 330/三三九頁）を理論的に徹底する場面で、敵〈として〉あらわになる相手に自分が純然たる敵対感情をいだくとき、政治性なき状況で決闘（Zweikampf）に臨む自分を案じる仕方で存在するが、この

43 「勇気」という感情に対するクラウゼヴィッツの高い評価を学的に理解するさい、考慮すべき歴史的事例は（vgl. H. Cohen, *Von Kants Einfluss auf die Deutsche Kultur*, S.31f.）、プロイセン軍の勇気重視か、あるいはナポレオン指揮下のフランス国民軍であろう（*Kriege*, S. 191/一九七頁）。また、クラウゼヴィッツのそうした理解を解釈する哲学的視点を設定するさい、キーゼヴェッターが、カント倫理学でのちにとりあげられる「窮余の嘘」という問題を検討していたことが参考になるかもしれない（cf. 田端信廣『書評誌に見る批判哲学：初期ドイツ観念論の展相』、晃洋書房、二〇一九年、第三章、第三節「キーゼヴェッター『道徳哲学の第一根本命題について』とその書評」）。つまり、自分自身に発するゆえに執拗かつ狡猾な自己愛の侵入路をすべて封じるため、「窮余の嘘」という事例で定言命法という究極態を思索しつづけることそれ自体が、自己愛の侵入を封じるかぎり、甘さを排除して冷徹な状況理解と軍事行動を維持する感情として、あるいはそうした維持ゆえに保たれる感情として、もしも勇気が成り立っているのであれば、考察の価値はあろう。自己愛や甘いささやきの問題は、ゴータマ・シッダルタの精神に執拗に侵入しようとしてくりかえし失敗する悪魔の様子を描いた『悪魔との対話：サンユッタ・ニカーヤⅡ』（中村元訳、岩波文庫、一九八六年）のブッダ思想と通じるものがある。

44 Aristotle, *Rhetorica*, II-2, OCT, 1378a23f.

決闘は、戦闘＝交戦という織り糸の繊維に喩えうる。純然たる敵対感情の場面における、自己、他者、状況のそうした共開示が情態的で解釈的な了解を通じて可能であるのも、われわれ人間は、世界が開かれる場の「現（Da）」を存在するからであり、この意味で人間は「現存在（Dasein）」と名づけられる（*SZ*, SS. 132-134）。そうした現を存在する有限的人間が存在する構えは「世界内存在」と呼ばれたが（*SZ*, §12）、自分自身が投げこまれた意味ネットワークの可能無限的全体である世界が戦時中〈として〉、あるいは戦場〈として〉と解釈的に了解され、或る完結した図式的地平となって機能するとき、現存在は「戦争内存在」[45]という存在体制を構えることが際立つ。これは、世界を特定の状況＝脈絡〈として〉情態的に了解するアスペクト知覚が現存在にもたらす、世界内存在の実存的限定化である。だから、普段の日常では陽気なスポーツマンも、戦時中は寡黙な斥候小隊長〈として〉スムースに偵察任務をこなしうるわけである。

同時に、こうした戦争内存在を実存で際立った存在の仕方として機能させるためには、「政治内存在」という存在体制を現存在はつねにすでに構えていなければならない。政府や実力組織のメンバーによって世界が政治的観点から解釈的に了解され、世界の政治的アスペクトが看取されて特定の図式的地平へと囲いこまれるとき、つまり、カール・シュミット的に言えば、メンバーは「友」〈として〉、相手は「敵」〈として〉、世界は政治的状況〈として〉共開示されるとき[46]、意味ネットワークの可能無限的全体である世界は隠れて機能するなか、世界内存在の実存的限定化を受けて現存在は政治内存在という存在論的な構えをとる。この政治内存在が政治的状況世界のアスペクト知覚＝解釈的了解によってさらに限定され、戦争内存在となるわけだ。

アスペクトは解釈的に了解される〈として〉のことだが、それは図式的規則を意味し、「概念の図式が当の概念をめぐる想像力の限界と見做しうる」（守屋）。それゆえ、世界のアスペクトはそのなかで多種多様な行為を意味づけうる地平的脈絡を意味した。

ここで統制的理念の絶対戦争と現実の制限戦争の違いをふまえ、自己、他者、状況の共開示と戦闘の目的との関係を確認しておく。戦争に別の仕方を組みあわせることは何ゆえに実行可能なのか、われわれは初めてこれから学ぶだろうが、もちろん徐々にでしかない。ここでわれわれは、概念からの現実性の逸脱として、あるいは個々別々の状況へと向かう何かとしてそうした組みあわせの可能性を認知すれば十分である。とはいえ、われわれが怠ってならないのは、ここですでに流血で危機を打破し、敵戦闘力を殲滅すべき尽力を戦争の嫡子とみなすことである。（*Kriege*, S. 61／六五頁）

「共同世界」（*SZ*, §26）をふくむ世界という意味ネットワークの可能無限的全体は多種多様な存在者の存在意味を織り糸にして「現存在のために（um des Daseins willen）」織りあわされ、一人一人の

45 「戦争内存在」概念にかんしては、藤岡俊博「横地徳広『超越のエチカ：ハイデガー・世界戦争・レヴィナス』（ぷねうま舎、二〇一五年）」書評（『図書新聞』、三二三七号、二〇一六年一月九日）を参照。

46 Carl Schmitt, *Der Begriff des Politischen, Text von 1932 mit einem Vorwort und drei Corollarien*, Duncker & Humblot Gmbh, 2015（1932）, SS. 27-35.

現存在はそうした世界が開かれていく先だという意味で世界の「趣旨（das Worumwillen）」だが（*SZ*, §18）、現存在それぞれが戦争内存在〈として〉存在する構えが世界内存在のなかで際立つとき、戦争という社会的実践にまつわる目的手段連関は戦闘を必須の織り糸にして戦争の内的脈絡として織りあげられる。戦争内存在という構えで存在する現存在に注目し、あえてハイデガー的強調をこめて引用すれば、「広義の戦争術には戦闘力の産出、すなわち、徴募、武装、装備、訓練が含まれ、戦争のために現に存在する（um des Krieges willen da sind）活動態すべてが属している」（*Kriege*, S. 102/一〇七頁）――クラウゼヴィッツ的には「現実に存在する」という意味での〝da sind〟だが。

それゆえ戦争活動態すべては直接的か間接的に必ず交戦にかかわる。兵士は徴募され、制服を着用し、武装し、訓練され、またその兵士が睡眠をとり、飲食し、行軍する。これらはすべて、適所適時にて（*an rechter Stelle und zu rechter Zeit*）交戦するためだけに行なわれる。（*Kriege*, S. 53f./五七頁以下、vgl. S. 102/一〇七頁）

現存在と呼ばれた有限的人間が兵士〈として〉戦場のなかで敵国兵への対応をスムースに実行可能であるのも、戦闘のために（um zu）「徴募され、制服を着用し、武装し、訓練されている」からであり、成人男性に必要な一日あたりの三〇〇〇カロリーを摂取し[47]、活動中に明朗な意識を保つか、少なくとも眠りに落ちないだけの睡眠をとっているからである。これらもまた、「適所適時にて交戦するため」、戦争の内的文脈に編みこまれている。

47　マーチン・ファン・クレフェルト『補給戦：何が勝敗を決定するのか』（佐藤佐三郎訳、中公文庫BIBLIO、二〇〇六年）の十一頁。

「ギリシア人たちは、『諸物』を表現するために或る適切な術語をもっていた」とハイデガーは指摘し（*SZ*, 68）、それは「プラグマタ、すなわち、配慮しながら扱うこと（プラクシス）でかかわられるもの」のことであったが（*SZ*, 68）、クラウゼヴィッツにとってのプラクシス、プラテインは戦闘を契機とした戦争行為の諸々であり、そのさいに「かかわられるもの」が兵器や装備、制服、宿営器具、食料であった。

このプラグマタの諸々もまた戦争の内的脈絡を形成しながら、そのなかでたとえば或るプラグマタはヘルメット〈として〉解釈的に了解され、ときにはバケツの代わり〈として〉水汲みに使用される。制服の着用者も映画村のエキストラ〈として〉ならば、特に気に留められることはないし、あるいは戦争ボードゲームの相手〈として〉友人に向かいあうとき、のんびりと次の一手を思案できるのは、現存在がいわば日常内存在という存在体制を構えるからであった。これに対して、自国の制服を着用して敵国兵や民間人と区別された「正規兵」〈として〉活動する人びとが[48]相手を現実の敵〈として〉察知し、瞬時の対応ができるのは、戦争内存在という存在体制を構えるからである。現存在は自己と他者の解釈的了解や世界のアスペクト知覚を通じて、戦争の内的脈絡のなかで存在する可能性へと自身を投げこんでいく。

それゆえ、戦争活動態の織り糸すべてが交戦に帰着するなら、われわれはまた織り糸をすべて把握し、そうして交戦の配列を決めるだろう。交戦のこの配列とその実行から出発する場合に

48　Vgl. C. Schmitt, *Theorie des Partisanen*, S. 11（シュミット『パルチザンの理論』、新田邦夫訳、ちくま文庫、一九九五年、三五頁）。

限って諸効果が生じるのであり、決して交戦に先行する諸条件に直接由来するからではない。さて、交戦にあって活動態すべては敵の殲滅か、むしろその戦闘力に向かっているが、それは、このことが交戦概念のうちにふくまれているからであった。したがって、敵戦闘力の殲滅はつねに交戦の目的を達成するための(um zu)手段である。(*Krieg*, S. 53f. / 五七頁以下、vgl. S. 102 / 一〇七頁)

戦争の内的脈絡は、戦闘＝交戦を織り糸として兵士の徴募、制服、装備、訓練、睡眠、飲食、行軍を編みこんだ目的手段連関を構造的にそなえるが、「とはいえ、戦闘力、すなわち、武装員たちが使用される場面では戦闘の表象が必ず根底になければならない」(*Krieg*, S. 53 / 五七頁)。

実はこうした内的脈絡にかんしてヴィトゲンシュタインもまた、『心理学の哲学1』(*Remarks on the Philosophy of Psychology, Volume 1*, 1988)のなかで、こう述べていた。

君の部屋のいつもの場所にある昔から慣れ親しんだ家具を見てみたまえ！〔中略〕しかし私がそれを現在もっている文脈からまったく切り離してしまおうとする場合は、私はそれがもはや存在しなくなり、別のものがそれに取って代わったと言うであろう。

確かにひとは次のように感じることもありうる。「すべてのものは他のすべてのものの一部をなす」(**内的脈絡**と外的脈絡)。或るものを動かしてみると、それはもう以前と同じものではない。この机がこの机であるのは、この環境のなかに限られる。[49]

49 L. Wittgenstein, *Remarks on the Philosophy of Psychology, Volume 1*, Blackwell, 1980, § 329.

またハイデガー『存在と時間』の第十五節「環境世界で出会われる存在者の存在」で説明されるところ、道具は「本質的に『〜するための(um zu)何か』」であり(*SZ*, S. 68)、この「『ための』という構造にふくまれているのが、何かを何かへと指示することである」(*SZ*, S. 68)。それゆえ、たとえば「筆記用具、ペン、インク、紙、下敷き、机、ランプ、家具、窓、ドア、部屋」は(*SZ*, S. 68)すでに相互連関しており、つまり、「こうした個々の道具に先立ち、そのつどすでに或る道具全体性が発見されている」(*SZ*, S. 69)。

ヴィトゲンシュタインとハイデガーに共通するプラグマティック・ホーリズムによれば、私が暮らす自宅とそこにそなえつけられた家具や調度品の数々は、私に生きられる内的脈絡を形成している。学習机は、タンスの高いところにある荷物をとる〈ための〉足場〈として〉使用するとき、学習机〈として〉の意味は潜在化している。しかも、このとき足場は、学習机ではなく、椅子や木箱でも構わない。これが日常性のプラグマティック・ホーリズムであり、たとえば野営でテントを設置するさい、高枝にロープをいわきつけために同僚の肩車で足場代わりになってもらう場合と事情はだいたい同じだが、とはいえもちろん、このとき兵士たちはいわば「日常内存在」ではなく、戦争内存在という存在論的な構えをとっている。

言語行為のプラグマティック・ホーリズムを論じた後期ヴィトゲンシュタインがアスペクト転換を説明するために注目した「内的脈絡」は、文脈の内的関係あるいは文脈という内的関係を指すが、この文脈は、個々の言語使用で生起する言語的意味と相互制約的に織りあげつづけられるなか、つまり、個々の意味を規定す

る文脈は、規定された意味の有機的集積としてリゾーム状の全体性を保ちながら、内部性をそなえるわけである。

この構造は、戦争の内的脈絡も同じであった。

＊

絶対戦争は直線的時間表象の限りなき果て、一種のキリスト教的終末であるかのように思えるかもしれないが、クラウゼヴィッツはおそらくそう考えない。絶対戦争はむしろ統整的理念として制限戦争の可能的現実すべてに向けて遍在し、多種多様な制限戦争の一つ一つをそのつど照らしだす。しかも、絶対戦争は完全な統整的理念ではなく、つねに概念的完成の途上にあり、解釈学的観点から概念的整合性を高めつづける「ノイラートの船」だと言える[50]。

ただし、絶対戦争概念の造船技師にして船長のクラウゼヴィッツはすでにもういない。

「哲学者の仕事とノイラートが巧みに比較したのは、大海原で自分の船を修理しなければならない水夫の仕事であった」が[51]、「われわれが諸対象を問題とするさい、このことに着手しうるのは首尾一貫して理論体系とかかわる場合に限られ、この理論体系それ自体は、諸対象をまずはわれわれが受け入れることにもとづいている」[52]。クラウゼヴィッツ『戦争論』を読み解くわれわれはその水夫である。「われわれは、どこで終えるかはおそらく制限されていないにしても、どのように始めるかは制限されている」[53]。野家の物語り論的解釈学をふまえても、そう言いうる。

『戦争論』のプラグマティック・ホーリズムを問えば、それは、当然の結論かもしれない。

結び　カントとは道を違えて

小稿で確認してきたクラウゼヴィッツ『戦争論』のプラグマティック・ホーリズムを確認しやすいのが以下の箇所である。戦闘＝交戦を織り糸にして戦闘以外の多種多様な事柄が戦争の内的脈絡を形成することがまとめられていた。

或る大戦闘力の多種多様な組織化が思案され、あるいはその戦闘力を使用して効果が得られる多くの状況が思案されるさいに概念把握可能なことがある。それは、このような類いの大戦闘力による戦闘もまた多種多様に組織化され、配列され、相互連関しなければならないということである。この場合、組織化された個々別々のことのために、当然、多くの目的が生じうるし、生じなければならないが、この目的はそれ自体では敵戦闘力の殲滅ではないし、確かに程度は高くても間接的にしか効果をもたない。（*Kriege*, S. 54/五八頁以下）

世界のアスペクト知覚を介して限定された政治的脈絡において政府や実力組織のメンバーは情態的で解釈的な了解を遂行し、そ

50　野家「プラグマティズムの帰結：「ノイラートの船」の行方」（『増補科学の解釈学』所収）を参照。

51　Willard V. O. Quine, *From a logical point of view: 9 logico-philosophical essays*, 2nd and revised edition, Harper & Row, 1980 (1963), p. 79（『論理的観点から：論理と哲学をめぐる九章』、飯田隆訳、勁草書房、一九九一年、一一六頁）。

52　W. V. O. Quine, *Word and object*, M. I. T. Press, 1964 (1960), p. 4（『ことばと対象』、大出晃、宮館恵訳、勁草書房、一九八四年、六頁）。

53　*Quine*, *Word and object*, p. 4（『ことばと対象』、六頁）。

の一人一人に自己、他者、状況が共開示されるが、なかでも兵士や士官の場合、戦争の内的脈絡を生きるなか、つねにすでにその了解は、生まれや育ち、個性、体力、知能、職種、所属組織など人それぞれに異なる個別的条件から解釈学的負荷を受けている。現代解釈学の術語で言えば、「ナラティヴ・アイデンティティ」を織りあげる解釈学的自己が存在する仕方のことである[54]。クラゼヴィッツもまた、カントが敬愛した「啓蒙専制君主」フリードリヒ大王の「絶対王政」から、「ナポレオン戦役」での敗北と「ドイツ解放戦争」での勝利を経て、「国民国家」としての体制諸々を整えていったプロイセンの激動を生き[55]、またカント『永久平和のために』(Zum ewigen Frieden, ergänzte Auflage, 1796, 以下、Frieden と略記)やその紹介にふれてその「国民(Staatsbürger)」概念と近世政治思想を学びえたなか(Frieden, S. 120)、彼に固有のナラティヴ・アイデンティティを織りあげていった。

プロイセン国民一人一人がこうして代替不可能な物語り的固有性を形成する仕方をふまえると同時に、クラウゼヴィッツのカント主義を最大限に見積もりながら、彼がカント『永久平和のために』と道を違える仕方で思索しえた「講和(=平和、Frieden)」と「勝利(Zieg)」について、小稿では最後にその可能的内実を検討しておく。

『クラウゼヴィッツの「正しい読み方」:『戦争論』入門』を著したベアトリス・ホイザーは、日本の読者にむけた「まえがき」で次のように指摘していた。つまり、『戦争論』が未定稿であるがゆえの矛盾を棚上げし、「自分たちに都合の良い教訓」を得るためのテキストとして『戦争論』を読んだ面々にとって、その教訓は「すべての戦争は軍事的勝利の追究、つまり我が意志を敵に屈服せしめるもの」であった[56]。その結果、「互いに利益となる安定的な講和の追究というクラウゼヴィッツ自身も見逃していた考え」を考慮する機会は失われたという見解である[57]。

この論点にかんして言えば、小稿でわれわれは、「すべての戦争は軍事的勝利の追究、つまり我が意志を敵に屈服せしめるもの」(『クラウゼヴィッツの「正しい読み方」』)という規定を教訓として引き受けるのではなく、「すべての戦争」を統整的理念の絶対戦争と有限的現実の制限戦争とに区別し、絶対戦争という統整的理念に照らして制限戦争の可能的現実すべてを解釈的かつ情態的に了解する構造を確認した。この観点から、『戦争論』における講和=平和の概念を考察しうる[58]。

54 拙稿「私は誰なのか:人造人間のナラトロジー」(持田、横地編著『戦うことに意味はあるのか』所収、弘前大学出版会、二〇一七年)を参照。

55 以下を参照。ラルフ・プレーヴェ『十九世紀ドイツの軍隊・国家・社会』(坂口修平監訳、丸畠宏太、鈴木直志訳、創元社、二〇一〇年)の第I部第二章「後期啓蒙と初期自由主義」および第II部第二章「長い一九世紀の軍隊の戦争」。三宅正樹、石津朋之、新谷卓、中島浩貴『ドイツ史と戦争:「軍事史」と「戦争史」』(彩流社、二〇一一年)の第四章「リュヒェルとシャルンホルスト:転換期における啓蒙の軍人」および第七章「ドイツ陸軍:ドイツにおける「武装せる国民」の形成」。蔭山宏『崩壊の経験:現代ドイツ政治思想講義』(慶応大学出版会、二〇一三年)の第一部「市民層の社会意識:現代思想の前提」を参照。

56 B・ホイザー『クラウゼヴィッツの「正しい読み方」:『戦争論』入門』(奥山真司、中谷寛士訳、芙蓉書房出版、二〇一八年)の一頁を参照。

57 B・ホイザー『クラウゼヴィッツの「正しい読み方」』の一頁を参照。

58 平和概念にかんしてバジル・H・リデル=ハートが行なったクラウゼヴィッツ批判は、ホイザー『クラウゼヴィッツの「正しい読み方」』の三一〇頁を参照。

政治、戦争、講和の関係をクラウゼヴィッツは次のように述べている。

これに対してわれわれは、戦争は〔外交などとは〕別の手段を交えた政治交渉の延長にほかならないと主張する。別の手段を交えたとわれわれが言うのは、それで同時にこう主張するためである。すなわち、この政治交渉は戦争自体で中断されるわけでもなければ何かまったく別のことに変容するわけでもなく、政治交渉に使用される手段がどのような形態をとりうるにしても、政治交渉はその本質において維持されるということである。戦争の出来事諸々は幹線にそくして広がり、結びつけられるが、この幹線はそうした出来事諸々の配列にすぎず、戦争のあいだずっと講和に至るまで伸長する。(*Krieg*, S. 329/三三八頁)

クラウゼヴィッツがカント『永久平和のために』を読むか、その関連講義などにふれる機会があったなら、講和の観点から、制限戦争を一定期間停止する休戦協定、複数国家間で国際法に従って締結した平和条約、講和なき休戦の継続などを見分けていたはずである(*Frieden*, S. 118)[59]。

制限戦争は政治の内的脈絡にふくまれていたが、講和もまたそこにふくまれ、制限戦争における勝利の軍事的意味はその講和を介して政治的意味〈として〉表現される。とはいえ同時に、制限戦争は絶対戦争と区別されてもいた。

だから、クラウゼヴィッツは政治と絶対戦争の関係を吟味するため、こう自問する。

……戦争立案のさい、政治的立場は純粋な軍事的立場に席を譲るのか(そもそもそうして純粋な軍事的立場が想定可能だとすればだが)、つまり、政治的立場はすっかり消え去るのか、純粋な軍事的立場に従属するのか。あるいは政治的立場が支配的なまま、軍事的立場は政治的立場に従属しなければならないのか。(*Krieg*, S. 332/三四一頁)

これらの問いに対するクラウゼヴィッツの答えは「否」である。それは、政治性なき絶対戦争を遂行する「純粋な軍事的立場」は可能的現実〈として〉成立しえないからであった。だとすれば、講和は、戦争の内的脈絡がふくまれた政治の内的脈絡のなかで、有限的現実の制限戦争によって達成された軍事的勝利の意味を政治言語で語りだしたものだと言える。

とはいえ有限的現実の制限戦争は、小稿で確認してきたとおり、統整的理念の絶対戦争に照らして解釈的に了解されるプラクマティックでホーリスティックな構造をそなえるかぎり、制限戦争における軍事的勝利の意味もまた絶対戦争のそれに照らして解釈的に了解されてもいる可能性がある。具体的政治の可能的現実と政治性なき絶対戦争とのあいだで、制限戦争の軍事的勝利は政治の内的脈絡において講和として表現されるとすれば、二つの問いが浮かぶ。

まず、制限戦争は具体的政治の可能的現実と政治性なき絶対戦争とを媒介する「第三者」[60]として何らかの図式機能をもつのか。

59　参考まで、併せて山本草二『新版　国際法』(有斐閣、一九九四年)の関連各所を参照

60　『純粋理性批判』にあって「超越論的図式」という純粋な「媒介的表象」は、「一方でカテゴリーと同種的、他方で現象と同種的でなければならない第三者」とされた(B177)。

とはいえ小稿では、むしろ絶対戦争という統整的理念こそ、制限戦争という可能的現実すべての解釈的了解可能性が体系的に統一されうる範囲を発見する「図式の類似物」として機能することが確認された（小稿、第二節「クラウゼヴィッツの統整的理念と建築術」）。図式的なものによる可能的現実全体の限界画定は、ヴィトゲンシュタイン的に言えば、アスペクトの閃きに発した。

次に、有限的現実で制限戦争を終える講和は統整的理念としての「絶対平和＝絶対講和（der absolute Frieden）」に照らして内容が決まる可能性はないのか。

クラゼヴィッツが知りえたカントの「永久平和」概念、すなわち、「敵意すべての終わりを意味する平和」（*Frieden*, S. 118）は「将来、戦争になる素地（Stoff）」（*Frieden*, S. 118）をまったくふくまないかぎりで真正かつ純粋な概念たりうるがゆえに、そもそも平和概念は永久平和概念でなければならない。それは、とはいえ有限的人間たちが生きる社会で実現不可能な理念であるのも、「超感性的世界」（*Frieden*, S. 126）の永久平和を意味するからであった。こうした永久平和の対立概念は、カントが考えるところ、「殲滅戦（bellum internecium）」（*Frieden*, S. 122）であり、クラウゼヴィッツ的表現で言えば、絶対戦争である。

「絶滅戦争（Ausrottungskrieg）では双方が同時に滅亡し、こうして正義すべても根絶される可能性があるけれど、このとき永久平和は人類の巨大墓地のうえにしか築かれないだろう……」（*Frieden*, S. 122）[61]。

しかしながらクラウゼヴィッツは、カント『永久平和のために』で登場した概念のいくつかは受け入れても、その議論の仕方には肯かないはずである。

制限戦争を終える現実的講和は、人それぞれに異なる個別的条件から解釈学的負荷を受けて千差万別のナラティヴ・アイデンティティをそれぞれにそなえた人びと、つまり、政府や実力組織のメンバーたち、戦費負担や人材負担をした国民たちによって熟慮されることである。クラウゼヴィッツが「第二の父」シャルンホルストの影響下で生きたプロイセンではすでに「国民国家」と「近代政治」の形成が始まり[62]、「武装せる国民（Volk in Waffen）」という概念が登場していた[63]。プラグマティック・ホーリズムの観点から見れば、それは、大小さまざま、多種多様な内的脈絡で自己、他者、状況を解釈的に了解して生きる人間たちにとって当然の熟慮であった。

61　カントは、おそらく「人類滅亡の絶対戦争」を念頭に、こう記している。カントが生きた時代にあって絶滅戦争を実現する物理的手段は現実に存在しなかったので論理的に究極の事態を考えたということだろうが、現代世界では地球上から人類すべてを消し去る「核の絶対戦争」は物理的には現実化可能である。とはいえ、核の絶対戦争が現実化したさい、攻撃した側もいずれ地球で生存不可能となるかぎり、その絶対戦争に勝利と勝者は存在せず、つまり、戦争概念として成立していない。この点は、横地、吉川孝、池田喬編『映画で考える生命環境倫理学』（勁草書房、二〇一九年）の拙稿「〈絶対戦争〉後の世界を考えること：『風の谷のナウシカ』とわれわれ」を参照。

62　清水多吉、杉之尾宜生『物語　クラウゼヴィッツ『戦争論』』（日本経済新聞出版、二〇一五年）の二頁以下を参照。

63　清水多吉、石津朋之編著『クラゼヴィッツと『戦争論』』（彩流社、二〇〇八年）の一五〇頁を参照。カント『永久平和のために』で「武装せる国民」は“Staatsbürger in Waffen”と表現されていた（*Frieden*, S. 119f.）。

この解釈学的熟慮は、だから、哲学的リベラリズムを代表するジョン・ロールズが「無知のヴェール」を個々人にかぶせて平等条件を強調しつつ、人それぞれの個別性を棚上げして設定する一種の思考特化型自己間の計算的理性によって「公正としての正義」を実現しようとしたこととは異なる[64]。

あるいは、「討議的民主主義」を掲げるユルゲン・ハーバーマスが提示した「理想的発話状況」、つまり、「生活世界」と切り離された「コミュニケーション的理性」による「理想的コミュニケーション共同体」のなかで「討議的正義」を実現しようとしたこととも異なる[65]。

もちろん、政府や実力組織のメンバーをふくむ国民間の解釈学的熟慮それぞれがラプソディとして乱立するだけで終わるわけではなく、クラウゼヴィッツ的な意味での絶対平和＝絶対講和に照らしながら、制限戦争の現実的講和は国家的判断へと総合的かつ体系的に統一されることが試みられる。国民すべての解釈学的熟慮のこうした統一はあくまで統整的理念だが、この試みは、具体的な範型となりうる概念を求めれば、日本的概念になるが、「寄合」に近しい。つまり、家それぞれに固有の事情をかかえた農民が個々別々の事情を互いにすりあわせながら、毎年毎年、全員の了承をもって村の作付けなど村の存続策を決めていく寄合のことである。ただし、それぞれ社会的生が異なる国民全員にわかちもたれ

64　ジョン・ロールズ『正義論』（川本隆史ほか訳、紀伊国屋書店、二〇一〇年）の第二四節「無知のヴェール」を参照。

65　以下を参照。ユルゲン・ハーバーマス『コミュニケイション的行為の理論［中］』（藤沢賢一郎ほか訳、未来社、一九八六年）の第五章「ミードとデュルケムにおけるパラダイムの転換：目的活動からコミュニケイション的行為へ」。上田知夫「ハーバマスにおける真理と正当化：理想化なしの真理の合意説」（『東京医科歯科大学教養部研究紀要第』、第四九号、二〇一九年）。Jürgen Habermas, “Wahrheitstheorien”, *in: Kritik der Vernunft, Philosophische Texte, Band 5*, Suhrkamp, 2009.

小稿のこの段落は粗いまとめだが、基本的な理解は野家『言語行為の現象学』の第六章「言語行為の社会的次元：ウィトゲンシュタインとハーバーマス」および第八章「超越論的語用論の射程：英米哲学とアーペル、ハーバーマス」における「理想的発話状況」論の解釈に負う。ただし、「理想的発話状況」論への批判にかんしては（『言語行為の現象学』、第六章、第四節「生活世界的合理性」、二二二～二二四頁）、小稿の第三節「カントのプラグマティック・ホーリズム」にて、「生活世界的合理性」のいっそう根源的な次元から、それを行なった。つまり、見えやすいところで言えば、たとえば「ゲーム理論」の観点からクラウゼヴィッツ『戦争論』の絶対戦争概念を読み解くことは、等質的自己たちの計算的理性だけが機能する次元という意味でロールズやハーバーマスの立場に近しい可能性があるけれど、これに対して小稿では、それぞれ異なった解釈学的負荷を担う人びとによる非対称的なコミュニケーションの統整的理念や「超越論的事実性」のいずれにせよ、それが平等な交換性を内蔵する理想的発話状況だとは考えず、自己他者間のコミュニケーションのそうして原理的な非対称性との機能的関係を「生活世界的合理性」のうちに問うた。

このため、小稿ではプラテイン、プラグマ以来の概念的系譜をたどり、この試みは、それゆえ、リチャード・ローティのポリティカルな意味合いのプラグマティズムはふくんでいない。ローティやハーバーマス、ロールズは、人それぞれ千差万別の解釈学的負荷を削りとって平等な交換性を原理的な次元に設定してはいまいか。

野家が説明するところ、「世界像」はたとえばピーター・ウィンチの言う『生、死、性関係』を軸にして組織されたわれわれの生活実践の構造」であり（『言語行為の現象学』、第六章、第四節「生活世界的合理性」、二一三頁以下）、その「生、死、性関係」こそ、人それぞれに千差万別、とりかえのきかない固有性がもっとも濃い「岩盤」だが、「どのように私は或る規則に従いうるのか」と問われたときに「そうして私はとにかく行為する」と答えるしかなく、同時に他人たちからレスポンスがあったとき――たとえば銃撃に敵兵が反応するとき――、社会的実践が依拠する「岩盤」という経験的アプリオリは間接的にあらわになる（L. Wittgenstein, *Philosophical Investigations*, §217, p. 91）。そうして他人たちからレスポンスがない場合もあり、それは、共有された岩盤が存在しないからである。

る統一的寄合は、その国家的規模ゆえに不可能だという意味でやはり統整的理念にとどまる。

ここで強調しておくべきは、『戦争論』とその時代状況にそくして絶対講和＝絶対平和を想定する場合、政治性なき絶対戦争の軍事的勝利、つまり、敵国軍戦力すべての物理的殲滅を敵国民と敵国政府に向けて政治的に表現したものになるはずである。制限戦争とそれを終える現実的講和の関係を前提に考えれば、このように言える。

しかしながら『戦争論』では、絶対戦争の統制的理念によって制限戦争の可能的現実が照らしだされるのであって、制限戦争とその現実的講和の概念をまず前提し、それに照らして絶対戦争の理念的内容を規定する順序ではなかった。制限戦争の可能的現実を解釈的かつ情態的に了解する前提は、絶対戦争の統整的理念であった。

これらのことを確認してわかるのは、「制限戦争の現実的講和は統整的理念としての絶対平和＝絶対講和に照らして内容が決まるのか」という第二の問いは、「制限戦争は具体的政治の可能的現実と政治性なき絶対戦争を媒介する第三者的図式なのか」という第一の問いの延長上にあるということである。

もし制限戦争が第三者的図式であるなら、絶対戦争が図式の類比物として機能する必要がなくなってしまうかぎり、答えは「否」である。それゆえ、制限戦争とそれを終える現実的講和の関係をふまえて絶対講和＝絶対平和は絶対戦争の軍事的勝利を「政治性の無」という特殊な政治性〈として〉表現したものだと言いうるとすれば、それは、すでに絶対戦争の統整的理念に照らして制限戦争の勝利がもつ軍事的意味は規定され、制限戦争を終える現実的講和の政治的意味〈として〉表現されていたからである。

統整的理念の絶対戦争における勝利至上主義のもとで有限的現実の制限戦争における軍事的勝利の意味を見定め、そのうえで初めて、社会的生がそれぞれ異なる戦勝国民すべてが徹底した解釈学的熟慮を互いにもちより、その軍事的勝利の意味を講和条件として相手国に表現することが可能になる……。

カント『永久平和のために』に肯かないはずのクラウゼヴィッツは、プロイセンが近代の国民国家へと変貌するさなか、そう考ええたのではあるまいか。

たとえば敵国による自国への侵略を阻止した防衛戦争の有限的現実における勝利の軍事的意味は、今後一切、自国が敵国から侵略を受けない完全勝利という統整的理念の具体的内実を隅々まで見定めるなかで初めて了解され、このように統整的理念としての勝利至上主義にもとづいて勝利の軍事的意味を政治の内的脈絡で表現した講和条件が可視化される。これは、カント主義者クラウゼヴィッツの一種の超越論的哲学と言ってよい。

あるいは、彼のこうした超越論的哲学にもとづくことで、ロールズやハーバーマスがそれぞれ考える「正義」概念とは異なる仕方で自国民と自国の防衛に現実的正当性を認め、その内実を見定めることも可能になる。つまり、有限的現実の防衛戦争は絶対戦争ではないがゆえに、不完全勝利ではふたたび同じ敵国やその同盟国から侵略を受ける可能性は残りつづける以上、その可能性を一つ一つ具体的に明らかにして現実的対処を継続しなければならないが、こうした明示の遂行可能性も、絶対戦争の完全勝利に照

らして防衛戦争の不完全勝利が意味づけられうるからであった。自国民と自国を防衛してその長期的安全を確保することは、自国民と自国以外に委ねることはできない。

この点で、カント主義者クラウゼヴィッツはカントと道を違えるように思われる。

クラウゼヴィッツは、『永久平和論』の「世界共和国」(*Frieden*, S. 134)や「平和連合」(*Frieden*, S. 133)など「互いに利益となる安定的な講和の追究」として国家間同盟より上位のグローバルな組織を構想しはしなかったはずである。そうした講和や組織のあり方を追究するよりは、自国民と自国の長期的安全を確保する観点から長期的に維持可能な講和条件を探り、この講和条件に役立つかぎりで講和交渉の相手国の利益を見定めていた可能性がある。それは、自他の力を冷徹に見定めてフィレンツェ共和国の政治的現実を構築したリアリストのニコロ・マキアヴェッリが残した著作をクラウゼヴィッツが好んだことからもわかることである[66]。

凡例

小稿での**太字**強調は論者、原著から引用して訳出するさい、傍点強調は原著の*italic*あるいはＧｅｓｐｅｒｒｔである。**クラウゼヴィッツ**『戦争論』からの引用、訳出はレクラム文庫版をもちい、適宜、ニコル社の『戦争論』第一版「完全版」を参照した。参照の便宜のため、レクラム文庫版の頁数につづけて、芙蓉書房出版の日本クラウゼヴィッツ学会訳の頁数を漢数字で付した。**カント**の著作から引用する場合、『純粋理性批判』は哲学文庫版(Band 37a)をもちい、また、ローマ数字はアカデミー版カント全集の巻数を示し、つづけて頁数を記した。**ハイデガー**の著作から引用するさい、*SZ*はニーマイヤー社版『存在と時間』(第十七版)、*GA*はクロスターマン社版ハイデガー全集を示し、つづけてその巻数、頁数を示す。

小稿で主に参照した著作は以下の略号によって示し、つづけて頁数を記す。

66 C. v. Clausewitz, "Ein ungenannter Militär an Fichte, als Verfasser des Aufsatzes über Machiavell im ersten Bande der » Vesta «", in: *Kleine Schriften*, Tradition Classics, 2012. Cf. P. Paret, "Machiavelli, Fichte, and Clausewitz in the Labyrinth of German Idealism", pp. 90-92.

《一次文献》

Kriege: Carl von Clausewitz, *Vom Kriege*, Reclam, 1980 (1832).

A / B: Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Ph. B., Bd. 37a, Meiner, 1990 (1781 / 1787).

Frieden: I. Kant, *Kleinere Schriften zur Geschichtsphilosophie, Ethik und Politik*, Ph. B. 47, Meiner, 1964.

SZ: Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, M. Niemayer, 17te. Ausgabe, 2006 (1927).

《二次文献》

Idealism: Henry Allison, *Kant's Transcendental Idealism, An Interpretation and Defense, Revised and Enlarged*, Yale University Press, 2004.

Commentary: Norman Kemp Smith, *A Commentary to Kant's 'Critique of Pure Reason'*, 2nd edition, The Macmillan Press, 1923.

Tales: Robert Brandom, *Tales of the Mighty Dead, Historical Essays in the Metaphysics of Intentionality*, Harvard University Press, 2002

理由：門脇俊介『理由の空間の現象学』、創文社、二〇〇二年。

試論：福谷茂『カント哲学試論』、知泉書館、二〇一〇年。